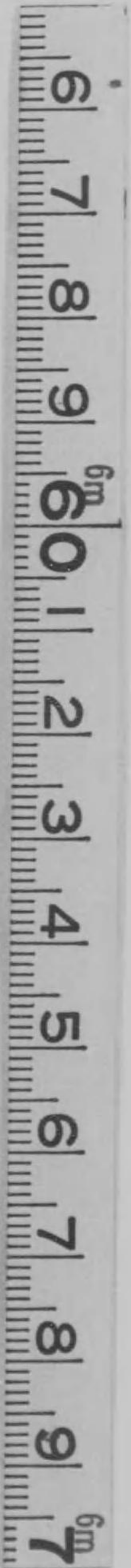


391
258



始



211

391-254

小説
渦
 田山花袋



竹久夢二裝

日本評論社版

大正
 10 2 23
 交内

渦

田
山
花
袋



「一緒に行って見ませうよ」

かう言つて女は勧めた。女は静かに立上つた。

「何アに、行つて見なくつても好いよ。」

「でも、すぐ其處よ。わけはなくつてよ。行つて御覽なさいよ。」

男の行くのを信じ切つてるといふやうに、——寧ろ自分の思ふやうに如何やうにも男を自由にすることが出来るといふやうに、女は氣早く障子を明けて上り端に下りた。派手なお召の羽

織と、長い巻と、白足袋とが際立つて此方から見えた。

男はまだ坐つてゐた。容易に立上らうともしなかつた。

「行らしやらないの？」

女は下駄を穿いてから、此方を覗くやうにして言つた。

「でも……」

かう男が躊躇してゐると、女はまた上つて来て、

「行らしやいよ。随分貴郎も強情ね。言ふとは素直に聞くものよ。」

「でも、空屋なんか見たツて仕方がないぢやないか。」

「夫はさうですけど……私が始めて持つ家ぢやなくつて？」

貴郎も随分薄情ね。」

「ぢや、行つて見るかな。」

男は立つて傍に脱いで置いたインパネスを被つた。やがて並んで歩いて行く二人の姿は、溝

のある狭い長い巷路の中に見えてゐた。夕暮の風が薄ら寒く肌に染みた。

もうそろ／＼灯の點いた家などもあつた。三味線の音が賑やかに其處此處から聞えた。

「成たけやすい明看板をと思つて、それは随分骨を折つてよ。屋號をついで呉れるんならツて言ふ人はいくらもあるんですけど——それなら安いですけどもね、それぢやイヤですからね、人の屋號なんか……」

かう言つて笑つて男の方を見て、

「何か、好い名をつけたいわね。貴郎、考へて下さるわね。」

男はそれには答へずに、不意に思ひ出したやうに、

「此頃清水に逢つたかい？」

「逢はないわ。」

古痕の痕にでも觸られたやうに、女は俄かに顔を曇らせた。黙つて五六間歩いたが、

「もう、そんなこと言ひつこなしよ……私だつて厭な氣がするわ。」

「でも、あれから、此の土地で、大分騒いでゐたつて言ふぢやないか。」

「それはさうよ。」

「誰だえ？ 相手は？」

「もう、およしなさいよ。私だつて、随分、あの人にはお世話にもなつたんだから……濟まな
い位は思つてゐるんですから。」

少時考へて、

「貴郎だつて、矢張さうでせう？」

「それはさうだね。」

男の聲にもいつもに似合はない眞面目な調子があつた。二人は黙つて歩いた。角帯をした箱
屋の政どんといふ男が、挨拶して笑ひながらすれ違つて通つて行つた。でも、二人は猶黙つて

歩いた。

二

少し經つてから、

「でも仕方がないわ、成行きだわ。」

かう言つた女の聲は沈んで居た。段々出ることが出来なくなつて來た逕路が手に取るやうに
男には見えた。

今はさうでもないが、其時の熱心は自分ながら不思議に思はれる位であつた。……相手が清
水であると聞いた時は、眼の前を青い、黄いものが通るほど頭腦が眩惑した……ブルブル體が
戦へた……

「本當に成行つて言ふものは何うすることも出来ないもんだ。僕と清水との間がお前の爲めに

かういふ風にならうとは思ひもかけなかつたからね。」

「私が悪いのよ。」

かう言ひかけたが、

「でも、知らなかつたんですものね。仕方がないわ。初めからさうと知つてりや、私だつてこんな風になりやしないわ。それに、清水さんも悪いのよ。」

「何故？」

「私、何んなに悪口を言はれたと思つて？ 私、今までそんなことを誰にも、貴郎にも言はなかつたけれど、それは言はれてよ、悪口を。畜生だ、獸だなんて言はれてよ。それは、清水さんにはお世話になつてゐるし、随分長い間ですからね。こんなになつては濟まないやうな譯もあるわ。けども、あの人は一體昔からあゝいふ風よ。頑固ね。それが性質なんだから爲方がないわ。私だつて、獸あつかひにされちや厭だわ……」

笑ひかけて、

「でも、そんな話よしませうよ。折角、私、自前になれてうれしいと思つてゐるのだから。そんな話をするとなんか気がするわ。」

「それで、母さんは何時来るんだえ？」

「遅くも、今月中頃には、一緒になるつもりよ。」

「母さんが来て世話して呉れりや、それや一番好いね。」

「私、初めは、堅い婆やでも置いてと思つたんですけど、とても駄目よ、私一人では……。いろんな人が入込んで来ますもの。政次さんの許など、さういふ氣の置ける人がゐないもんだから、それは大變よ。變な人が火鉢の傍で朝から酒など飲んでゐるんですからね……。あれちや仕方がないわ。」

「それは旦那ぢやないのかえ？」

「旦那は別にあるのよ。」

二人はある巷路の奥のやうなところに来てゐた。其處には、同じつくりの家屋が五六軒兩側に並んで續いてゐた。板塀の中から裁込の松の見える家などもあつた。路側の水道管の前には仕込に置いてあるらしい十二三の可愛い女の兒が、手桶に水の一杯になるのも知らずに熱心に此方を見てゐた。

同じつくりの一軒の家屋の前に来て、小刻に歩いて來た足を女は停めたが、

「此處よ、」
かう言つて、雨戸を明けた。

三

「これをお穿きなさいな。」

其處に置いてある朝裏草履を女はかう言つて男の前に並べた。

空屋らしい埃塵のほひがそれとなくあたりに漂つて居た。

入り口はたゞきになつてゐて、それから六疊と八疊とが續いた。一方の障子を明けると、其處は勝手元になつてゐた。引き残した引窓からは、薄暮の光線がうす暗く板の間に落ちて居た。

「これでも人が入ると、見違へるやうに綺麗になるのよ。……私ね、もつと好い處をと思つて随分さがしたんですけれど、思ふやうな處がないんですもの。」笑ひかけて、

「仕方がないわ。まア、當分、これで我慢するのよ。」

「澤山だよ、これで……」

「頭を入れて、すつかり掃除して貰ふ積りなの。前に入つてゐた人が随分ものぐさだつたから、縁の下などは、それは塵埃があつてよ。疊もすつかり取かへるやうに大屋さんに話して置いた

わ。」

「母さんの来るまでにすつかり準備して、綺麗にして置かなくツちやならないね？」

「だから、大變よ、却々……。私一人ですものね、それでも今ゐる家のお爺さんは、何の彼のツて世話を焼いて呉れるわ……。蝶次さんが始めて家を持つんだからなんて……」

「僕も手傳に来やうか？」

「戯談のやうに男が言ふと、」

「本當に来て頂戴よ、戯談でなしによ——」

こんな話をしながら、二人は庭先の雨戸を明けたり、押入の暗い中を覗いて見たりした。庭にはごよう松、檜の木が一本あるばかりで、すぐ塀になつてゐた。

「もう少し庭があると好いね。」

「さうね、鼻先が支へてゐるわね。もう一間向うに廣いと好いんだけど——借家では自由に

ならないわ……。その中、自分で拵へるから好いわ。」

「い、旦那でも探してね？」

「今でも拵えてよ、もう。拵へて呉れる人なんかいくらでも——」

女が先に立つて、狭い二階の階梯を上つて行つた。上り兼ねて男が下に立つてゐると、

「早く上つていらつしやいな。」

「でも埃だらけぢやないか。」

「大丈夫よ、」

雨戸を二三枚繰ると、其處から四邊がひろくと明るく見渡された。藝者屋の裏らしい物干だの、物干に取残された着物だの、勝手元の灯だのが一日に見えた。十二月の空はくつきりと晴れて、町の大通りの二階三階の大きな家屋が、明るい夕焼の中に黒くくつきりと輪廓を見せ

「あれがお定姐さんの家よ。」

女はかう言つて男に指して見せた。それは灯の明るい二階家であつた。其隣からは長唄の三味線が賑やかに聞えてゐた。

四

田舎から母が出て来て、蝶次はやがて今まで居た家から獨立した。

明看板の話もきまり、届も済み、岸の家といふ屋號も出来、入口の丸い軒燈も電氣屋さんに頼んで逸早く取附けるやうにして貰つた。

「もう瓦斯も来たよ。東京は便利だね！」など、母親は言つてゐた。

元居た家のお爺さんが何の彼のと親切に遣つて来ては、いろんなことを手傳つてして呉れた。縁喜棚を吊つて貰つて、切火が打てるやうになると、そこらが何處となく藝妓屋らしくなつて

来た。

「矢張、縁喜棚ツて言ふものは、藝妓屋にはなくつちやならないものね。」

蝶次は機嫌の好ささうな嬉しさうな顔をして、こんなことを言ふと、

「それは何うしてもさうだね。縁喜棚が明るくツて、切火の音が始中終するやうでなくツては駄目だね。」

お爺さんは、のろくした聲で、自分の吊つた縁喜棚を見上げながら言つた。

「おつかさん、お灯を上げて下さいな。」

蝶次は勝手元で何かゴトゴト音をさせてゐる母親に聲をかけた。

其處に、三毛の猫がのそくと遣つて来て、蝶次の膝の上に黙つて蹲つた。毛並の好い大きな猫だ。

「おう、来たか、来たか。」

かう言つて、蝶次は餘念なくその頭を撫で、やつた。

蝶次は長い間、三毛の男猫を欲しいと思つてゐた。何んな場合でも三毛猫の姿を見た場合には、黙つて通り過ぎることの出来ないほど、それほど蝶次は三毛猫にあぐがれてゐた。しかし三毛の男猫は容易に得られなかつた。ある待合さんと、ある姐さんと、それからもう一軒ある處で見たばかり、あとは大抵は雌猫であつた。それでも蝶次は何うかしてその望みをかなへたと思つてゐた。三毛の男猫を抱いてゐるその待合の上さんの姿を見ると、くわつと羨しくなるほど欲しいと思ふやうな時さへあつた。忘れもしない、それはお客さんとお定姐さんとそれから酌さんと四五人づれで、西新井へお詣に行つた時だつた。秋の晴れた日だつた。お詣をして、お茶屋で御酒を頂いて、好い心持で、勝手なことを饒舌りながら歩いて來ると、お酌さんが、

「あれ、蝶次姐さん、三毛がゐるよ。」と、教へて呉れた。はつと思つて見ると、其處に一軒

汚い百姓家があつて三毛の小猫がちよろちよろして遊んでゐる。

「男だつて聞いた時の嬉しかつたこと、本當にあんなに嬉しいと思つたことはありませんでしたわ。でもね、譲つて呉れるか何うかと思つて、それがまた心配になつてゐると、その婆さんが、そんなに欲しけりや上げやすベツて、平氣で譲つて呉れた時は、嬉しいの何のツて、私は五圓禮をお婆さんの手に無理に押つけて、そして猫を抱いて駈出したが、その風が可笑しかつたつて、そのお客様に逢ふと、今でも一つ話よ。」

蝶次は、猫の話が出ると、いつでもかう言つてその時の話をした。

五

その三毛猫を伴つて來てから、もう三年になる。蝶次は何んなにそれを可愛がつたらう。「家に、い、人が待つてゐる。」

こんなことを言つて、よく仲の好い友達と笑つたことがある。夜、遅くお座敷から歸つて來ると、にヤアにヤア言つて、飛んでその裾にまつわつて來る。床の中にも入つて來て、ゴロゴロと嬉しさうに咽喉を鳴して寝る。朝、目を覺すと、屹度其の枕元にちよこなんと坐つて居る……それが居ないと、寢衣も著改へないで蝶次は大騒ぎをしてあたりを探し廻すのが例になつて居た。

元、居た家でも猫が好きで、お爺さんも婆やも女中も皆な三毛々々と言つて可愛がつて呉れた。

「ほら今度お前の家が出来たんだよ。近いからまたちよいとお出よ。」
引越して來る時、婆やはこんなことを言つて、長火鉢の猫板の上に乗つてゐる猫を撫で、居た。

「おぢいさんになつてね、此猫！」

蝶次は誰に言ふともなく膝の上に蹲つて居る猫の頭を撫でながら言つた。

「三年も経つと、こんなになつて了ふのかしら？ ほら、ね、母さん、もう、何うしてもお爺さんの顔よ。」

かう續けて言つて、右の手で首の處を持ち上げて、其處にゐる母親の方に猫の顔を向けて見せた。

「でも、猫は七年位生きて居ると言ふぢやないかえ？」

「七年位？ さうかね。それぢやまだそんなに、おぢいさんでもないのね。」

格子戸が靜かに明いたと思ふと、箱屋の政どんの顔がチラと硝子越に見えた。

「何處？」

「永樂ですがね……」

「永樂？」

かう言つた蝶次は、もう上り端の障子を細目に明けて、白い顔を外に出してゐた。日は暮れか、つてゐた。前の喜代次姐さんの家では、もう灯が明るく縁喜棚についてゐた。

「永樂なんて、随分めづらしい家ね。私、彼處には行つたことがない位ですがね。」

「お客さんは誰だか解らない？」

「御存じの方のやうでしたよ。」

「さう？」

もう一度考へて、

「ぢや、兎に角、行くわ。」

箱屋が歸つて行くと、蝶次は電氣をつけて、鏡臺を出して、さつき既に一時間もかゝつておつくりをした髪をもう一度毛筋で直したり、合せ鏡をしたりして、さてそれから花吳産を敷い

て、簞笥から著物を出した。

「襦袢は此間買った方の襟のついてゐるのを出して頂戴！」

蝶次は先づ白足袋を穿きながら、傍で手傳つて居る母親に言つた。

「帯は？」

「竹のが好いわ。」

ポツポツ草花の縫のしてある襟は、仕度の出来た女をいつもより一層艶に見せた。

「永樂？ 不思議ね。」

蝶次はまだ考へて居た。

六

襖の間からそつと隙見をした蝶次は、清水が例の大島の羽織に金ぐさりといふ扮装で、餉臺

の前に一人でさびしさうに坐つて居るのを見た。
そつと帳場に来て、

「お上さん、あのお客さん前から御存じなの？」

「いゝえ、さう古いお馴染でもないけれど、此處のところ、五六度来て下さるのよ。お前さんよく知つてるの？」

「え、知つてるには知つてるけど……」

上さんの顔を見て、

「私、鳥渡困ることがあるの。」

「困ることツて、何うしたの？」

「少し譯があるんですの……」

上さんは考へて居たが、

「あのお客さんはね、いつもはいろんな妓を聘んで、面白く騒いで遊んで歸るのだけれど、今日は何うしたんだか、是非、お前さんに逢ひたいツてね。鳥渡でも好いから、十分でも二十分でも好いからツて、さう仰るんだから……」

「困るわね。」

懷中鏡を出して、顔を見たり、此頃動き出してゐる奥歯をせつたりしてゐるが、漸く決心したといふ風で、鏡を帯の間に入れた。

「仕方がないわね。」

かう誰に言ふともなく言つて、そして向うに立つて行つた。

「まア、貴郎なの？」

座敷の入口で、わざと驚いたやうに聲をかけて、其儘餉臺の傍に行つて坐つた。
蝶次は酔つてゐてそれで生真面目な容の氣分の壓迫を夥しく感じた。

「よく来て呉れたね、僕は来て呉れないかと思つた。いつもの處からかけやうと思つたけど、僕だと知れると、来て呉れないだらうと思つて……。」

かう言つた客の言葉にも、一種の軽い反抗を覺えずには居られなかつた。

「でも、今日は是非逢ふ積だつた。逢はずには歸らない積だつた。」
客は續いてこんなことを言つて、傍に置いてある猪口を女にさした。蝶次はそれを受けながら、

「でも、本當に、こんなところから、貴方にかけてやうとは思はなかつたわ。……私、此家などには、丸で来たことなどないんですもの……危く斷るところだつたわ……」
「氣の毒だつた。それは、僕だつて、よく知つてるんだよ。こんな處からかけたくはないんだよ……。」

蝶次の返した猪口をぐつと干して、

「でも、来て呉れて嬉しかつた。いつも變らない機嫌の好い顔を見るのが何よりも嬉しいよ。お世辭でも何でもありませんよ。君が丈夫で、全盛で、さうして暮してゐるのを見るのが何よりもうれしいよ。……僕だつて、そんな淺ましい心ばかり持つてゐやしない。君と何んな關係になつたつて、會ては僕の心を握つてゐた君なんだ。イヤ、かうなつた今でも、未だに僕の心を握つてる君ぢやないか。」

「酔つてるわね、貴方、随分……。」

「イヤ、酔つてはしない。今日は君に是非聞いて貰はなくつちやならないことがあるんだから……酒になぞ酔ひやしない。」
かう言つて清水はまた一杯飲干した。

黙つて居ると、

「聞いて呉れるね。」

「え、聞くわ。」

「何うしても僕は、君に別れられない！」

かう突如に訴へるやうに言ひ出した聲は震へてゐた。

「僕はあの時から、何うかして君のことは思出さないやうにしようと思つて、それは苦心をした。あの時から、もう今ではかれは二月になる。其間、随分僕は酒も飲んだ。この土地へもわざわざ遣つて来て、君のわる口も言はんでもなかつた。何うかして忘れやうと思つて、僕は幾人も女も買つた。あの、お前の仲の悪い又奴なんていふイヤな奴をも、惜しい金を積んで買つて見たりしたんだ。馬鹿な奴ぢやないか。」

蝶次がまだ黙つてゐるのを見て、

「己のわるいところは、勘忍して呉れ。それはいくらでもあやまる。僕は、僕の親友でありながら、僕をかういふ境に陥れた木川なんて奴を憎むことは憎むが、——それは別問題だ。僕は……僕は……」

感情が急に激して来たといふやうに、聲を曇らせて、

「君と僕との間柄は、こんなにして別れられる仲ぢやなかつたんぢやないか。銚子へ行つたり舞坂へ行つたりしたことを二人は忘れやうとしたッて忘れられない仲ぢやないか。蝶次……さうぢやないか。」

「それや、貴方にはお世話になつたんですから。」

かう蝶次が思ひ付いたやうに言ふと、

「イヤ、僕は、今までお前にしてやつたことなどを考へてゐるんぢやない——そんなことを考へてゐるやしない。それがためにこんなことを言ふんぢやないから、それは誤解しちやいかん。お

前は僕が何ういふ人間で、何ういふ境過に居て、お前の爲に何ういふことをして、今何ういふ身になつてゐるかといふこと位お前はよく知つてる筈だ……。僕は今までこんな泣言を言つたことはない、愚痴をこぼしたことはない。それが、こんなことを言ふんだからよくく〜のことだと思つて呉れ……。藝者なんて買うものは、皆な未はかうだ。馬鹿だ、阿房だ。僕のやうなもの、毎日新聞の三面種にいくらも出て居る。身がつまつてわるいことをしたり、世の中に顔向けが出来ないやうになつたり……。さうでなくても、酒で體をこわしたり、頭をつかつたり、終には何うせ碌なことはない位なことは始めから解つてるんだ。僕だつて、さうだ。お前に關係してから、もう四年になるが、僕はその爲めに、もつと出て行かなければならない方へも出て行けなくなつたし、先輩にもにらまれるし、學問も出来ないし、仕事は怠けるし、自分の一生の半分は女の爲めに打壞したと、まア言へば言へるんだ。それよりも、蝶次、僕の家庭のことも考へて呉れ、僕の女房や子供のことも……」

かう言ひかけた清水は、急に涙が胸に一杯に込み上げて來たといふやうにそのまま兩手を顔に當てた。

八

暫くしてから、

「僕は何うしても君には別れられない、僕は君に逢はずには生きて居られないといふことをこの二月の間に十分に味はつた。酒を飲んで自分が解らない位になつても、君のことだけはすぐ頭に浮んで來るんだ。女と一緒に寝てゐても、矢張りやうに君が浮んで來る……。あの時、僕は何故容易なく君に別れることが出来るなんて思つたか、その心がわからない……」
蝶次は訊いた。

「奥さんは何うなすつて？」

「僕の細君か？ そんなことは聞いて呉れなくつても好い。」

「でも、お目にかゝつてゐるんだから心配になるわ。」

「僕の妻は！」

また激して、

「女なんて、駄目なもんだ。女には男の苦悶などは解りやしない。亭主が家を明けて、酒を飲んで、女を相手にしてゐるさへすれば、唯、道楽だと思ふんだ……。男が何んなに苦んでゐるかなど、いふことは、解りやしないんだ……。いゝさ、さういふ奴はドシドシ出て行つて呉れる方が好い！」

「ちや、此の頃ぢや家にゐらつしやらない？」

「何うでも好いよ、そんなこと」

かう言つた客は溜息をついて、仰向に身を倒して了つた。蝶次の眼には、小柄な、愛嬌のな

い、さびしい顔をした細君と、父親によく似た、おかつばの可愛らしい四歳位の女の兒とが鮮かに見えた。飛石の置いてある庭なども見えた。

いろ／＼なことを考へるといふ風にして、じつと蝶次がひとところを見詰めてゐたのもかなり長い間であつた。やゝ蒼味の帯びたくつきりとしたその白い顔は、急に静かになつた一間の空氣の中に浮彫のやうになつて見えてゐた。

銚子をかへに來た女中に、

「姐さん、何かかけて上げて頂戴な、風邪を引くとわるいから。」
かう蝶次が言ふと、客は、

「何アに、かけるものなぞはいらない。寢やしない！」
すぐ起返つて、

「考へて呉れたかえ？」

「考へるも何も無いわ……。私は別れるつもりでも何でもなかつたんですもの。貴方が御自分で、獸だの、何だのツて言つて、私のわる口を言つて、そして一人できめて了つたんですもの。」

「木川が来るだらう？」

「此頃は滅多にお目にかゝらないわ。」

客は聲の調子をかへて、

「嘘ばかり言ふ？」

「嘘のことはないわ……。本當に滅多にお目にかゝらないわ。」

客は再び口を噤んで了つた。痛いところには、觸らないやうにもして置き度いし、觸らすにも置かれたいといふやうな心持で、二人は暫く相對して居た。

「何うして好いんだか、僕には解らなくなつた！」

胸に蟻つた苦悶を女に打突けるやうにして客は言つた。

九

「今度君が自前になるにつけて、木川が金を出したかえ？」

「それは少しはお世話になつたわ。」

「それぢや、君は、もう何うしても僕のことなんぞ考へてゐないと言ふんだね。」

「そんなことはないわ……」

蝶次は清水の顔を見て、笑ひかけて、

「貴方、一體、そんなことを言ふのは無理よ。」

「何故だえ？」

「だって、私、稼業なんですもの……。それは貴方だって解る筈ですよ。」

清水は下唇を噛んで居たが、再び興奮して来たといふやうに、

「それは、僕にだつて解るよ……その證據には、僕はこれまで一度だつてそんなことを言つたことがないぢやないか。相手が木川でなけりや、あの時だつてあんなことを言ひやしないよ。

……それにしても、女はよく平氣でゐられるね？」

「平氣でゐて、私？」

「居るぢやないか。」

「さう、それならそれで好いわ、男にも矢張女の心持は解らないわね。」

蝶次はかう言つたが、面倒臭くなつたといふやうに、傍に置いてあつた猪口をぐつと干して、

「もう好いぢやありませんか。そんなこと？ 際限がないわね。別れられなけりや、別れなくたつて好いのよ。……それより一つお明けなさいよ。今日から、またもとの蝶次になつて上げ

てよ。」

今度は男が黙つてゐるので、

「何うしたのよ。本當に。そんなにしてゐるんなら、私、もう歸りますよ。」

「もう少しして呉れ！」

慌て、かう言つた清水は顔を擧て、

「本當に、もとの蝶次になつて呉るね？ 僕のわろかつたことはすつかり忘れて呉れるね？……忘れて呉れる？」

今までとは違つたやさしい調子で念を押すやうに言つて、

「それなら、僕は何も言ふことはない。木川のことなどは言はなくつても好い。」

「木川、木川ツて、そんなこともうおよしなさいよ……私、何だか心持がわるくなるから。」

「もとの蝶次になつて呉れさへすりや……」

かう續けて言つた客は一層聲を震はして、

「もう、何も言はない。木川があつたツて好い。君が木川が好きなら好きでも好い。けれど、僕のこと考へて呉れるねえ。僕のこと、君の心の奥の何んな隅でも好いから藏つて置いて呉れるねえ。それさへ君が誓つて呉れば、何も僕は言ふことはない。……僕は、あの時から何んな風にして此土地をほうつき歩いてゐたか、君は知つてるかえ？ 知るまい？ 僕は……僕は……夜中にあのお宮の石段の下で酔ばらつて寝てゐたこともあつたよ。君の家の前を夜中に行つたり來たりしたこともあつたよ。僕はこれでも四歳になる子の親かと思つて、ぼろぼろ涙をこぼしたこともあつたよ。喚などは構はんけれど、子供のことを考へると、居ても立つてもゐられないやうな氣がするよ。……蝶次、今言つたことは本當だね？ 誓つて呉れるね？」

十

蝶次は眼が覺めてからも、長い間、床の中にぐづくしてゐるのが癖だ。

明るい日影が縁側にさして、向うの屋根の瓦は霜にぬれてゐる。雀が機嫌よく百、囀をしてゐる。角の水道管から一しきり水の出る音がして、其處で母親が何か話してゐるのが手に取るやうに聞える。

枕元に丸くなつて蹲居つてゐる三毛猫は相變らずゴロ／＼咽喉を鳴して居る。

蝶次の眼の前には、昨夜のことが歴々と繰返されて見えた。

「誓つて呉れるか。」

男はかう言て幾度も蝶次の手を握つた。

「何うしてあんなになつたんだらう？ あんな人ぢやなかつたのに……」

蝶次はかう考へながら、頭の中の光景をもう一遍繰返して見た。

「奥さんが子供を伴れて、里へ歸つてゐる？ さぞ、私のことを恨んでゐるだらう？ あの可

愛いおかつばのお嬢さん？」

「あゝ、いふ可愛い子が私も一人欲しい。」

氣が附くと、蝶次はいつかこんなことを考へてゐた。そしてその可愛い子と自分と自分の子とが一緒になつて見えてゐる。

「私も一人欲しいわ。もう私の體では出来ないでせうか。」

こんなことを何處かの座敷でお客に言つたことがあつたのを思ひ出した。

「私のことなぞ思ひ切つて下さい。それほど思つて下さるのは有難いけど……そんな風になつては私も辛いわ……奥さんにまでそんなに御心配をかけては……」

そんなことを昨夜も言つた。一年前にも言つた。三年前にも言つた。

「何故、私はかう奥さんのある人にばかり思はれるんだらう？」

それからそれへと蝶次は考へ込んだ。いろ／＼な顔が見えたり消えたりした。

軒では雀が相變らず機嫌の好い饒舌をつゞけてゐる。

ふと、電車の中で起つたある光景を思ひ出して居た。それはもう一昨年だ。あそこの柳のある停留場だつた。何の氣なしに、運轉手臺の方から乗ると、其處に茶色の中折を冠つて、高貴織の羽織を着て、頭を繻帶した七歳位の男の兒をつれた紳士が、向うむきになつて立つてゐる。ふと顔を見合せた蝶次は驚いた。

「まア！」

思はず蝶次はかう聲を立てた。それは蝶次が十八の時に引かされて行つた人であつた。

「まア、お久し振で、御機嫌よろしう御座いますか。まア、これが坊ちゃん、大きくおんななさいましたことね！ 何うかなさいました？」

あんなに狼狽した物の言ひ方をしたことはなかつた。

「お前も達者らしいね。結構だね……」

かう言つて、その人は笑つて、

「今は何處だえ？」

蝶次は其時、誰が見てもすぐ藝者と思はれるやうな風をしてゐた。まだ藝者をしてゐるのか——かう思はれるのが辛かつた……

「何故、私はかう運がないんだらう。」

蝶次はこんなことを自分で自分に言つて見た。しかし心持はそれと全く違つてゐた。自前になつたといふことや、一軒家を構へて兎に角かうして母親を呼んで一緒に暮らしてゐられるといふことや、段々位置が出来て姐さん達にも元のやうに馬鹿にされなくなつたといふことや——さういふことが何よりも嬉しかつた。

蝶次は寢衣のまゝ、白い綺麗な足を冷たさうにして、縁側を通つて廁へ行つた。手水鉢の傍の山茶花は朝日に濡れてゐた。

十一

「蝶ちゃん、居て？」

「何方？……雪ちゃん？」

蝶次は上り端の障子を細目に明けて見た。其處には仲の好い雪子が格子戸に凭り懸るやうにして立つてゐた。

「お上んなさいな。」

「好いの？」

雪子はかう言つて上つて來たが、朝の膳がまだ其處に片附けずに散ばつてゐるのを見て、

「お邪魔したわね。」

「い、のよ、もう濟んだのよ。」

「起るのが、これが遅いもんですからね。」

母親はかう雪子に挨拶して、

「床の中で眼が覺めてゐて、それで起きられないツて言ふんですからね。」

「蝶ちやんは、昔からさうよ。」

同じ家で同じやうに稼いで来た雪子は、蝶次の方を見て笑ひながら、

「でも、好い心持ね、床の中でくづ／＼してゐるのは……」

「何方かツて言へば雪ちやんもさうね。」

「二人でよくさうして寝てたぢやありませんか。朝だと思つたら、もう夕方、慌て、お湯に行つたことなどがよくあつたぢやなくつて？」

「さうね。」

蝶次は茶を汲んで出しながら、

「昨夜は何處？」

「鶴の家さんに鳥渡行つたきり、それもちき歸つて来たわ……。閑暇ねえ、此頃は、昨夜など動いたのは三つ一つよ。」

「しどいわね。」

かう言つたが、

「雪ちやん、明日の市村に行つて？」

「私も、實はそれを聞かうと思つて来たのよ……。もう忙しいし、此間も新富があつたし、さう／＼とは思つてゐるんだけど……」

「私もさう思つてゐるんだけど……」

鸚鵡がへしのやうにわざと言つて、

「私はまた、二人行かないのは、何んだか相談したやうでわるいから、雪ちやんに行つて貰つ

て、私は今度はよさうかと思つてゐたのよ。」

「さう？ 随分だね。」

かう雪子は笑つて、

「ぢや、よさうかねえ？ 相談したやうに思はれたッてそれは構やしないよ。何うせ、滅多に
かけて呉れもしない家なんだもの……」

「さうね、さうしませうよ。」

蝶次は勝手にゐる母親の方を向いて、

「母さん、昨日のがまだあつて？」

「あるよ。」

「何處にあるの？」

「今、出して上げるよ。」

かう言つて、母親は手を拭いて、座敷の方に行つて、溜塗の菓子鉢を持つて來た。中には藤
村の羊羹が、それでも五片位残つて入つてゐた。

「昨日、召上つた残り？」

先を越して雪子が言ふと、

「でも、よく残つてゐたのよ。」

「それはさうと。」

と、雪子は不意に思附いたやうに、

「昨日、清水さんに逢つてよ。」

「聘ばれて？」

「え、。」

「私も昨夜聘ばれてよ。」

「さう？」

と、雪子は眼を圓くした。

十二

「あなた逢つた時、誰が一緒？」

「随分、大勢居たわ。」

雪子は探ぐるやうに蝶次の顔を見て、

「あちら、随分酒が大變ね、私はあんなぢやないかと思つた。」

「酔つて？」

「それは大變よ。……少し何うかしてるんぢやないかと思つてよ。」

「何うかしてるのよ、屹度……。昨夜も酔つてたわ。」

「蝶ちゃんのことを随分言つてたわ。あいつは馬鹿だ！ あいつは馬鹿だッて、終には座敷中

ころがつて歩くんだもの……。松よしのお上さん困つてたわ。」

「又奴さんが居たでせう？」

「え。」

雪子は笑つてゐる。

其處へ戸外から、

「蝶ちゃん居て？」

「何方？ 妙吉さん、お上んなさいよ。」

「好いの？」

「雪ちゃんよ。」

「さう？」

と言つて、今年二十七八にもならうといふ、鳥渡綺麗な、背の高い、派手なつくりをした藝者が入つて来た。

雪子はいきなり、

「妙ちやん、氣になるわね。」

「もう知つてるの？ 雪子さんイヤになつちやうわね！」

長火鉢の角に投げ出すやうにだらしなく坐つて、其處に置いてある長煙管に煙草をつめて、

「一服頂戴な。」

とも何とも言はずに、スバスバ遣りながら、

「誰に聞いて？」

「誰に聞かなくつても、すぐ知れてよ。まだ便りが無い？」

妙吉は軽く唯點頭いて見せる。

「一昨日あたりから變だつたのよ。」煙管を下に置いて、

「それに、昨日が始めてぢやないのよ。もう前にも幾度もあつたのよ。……でも、私も随分頓

馬だわねえ。手紙が澤山、箱の中にかくして入つてるの知らずにするたんだもの。……何でも

小田原あたりの何處かの未亡人さんだとさ。去年、興行に行つた時に拵へて来たんだよ。」

「ぢや、お婆さんね？」

「い、え、後家さんツて言つても、まだ若いらしいよ。手紙をそつと出して讀んで見たがね。氣がわるくなるからよしたわ」

「罰だわねえ」

雪子がかう言ふと、

「何故？」

「何故ツて？ 何うせ、その位のことにはあるよ。誰れかの思だけでもあるよ。……少しは苦勞

する方が好いわ」

「本當よ。餘り見せつけてばかりゐるから、さういふ眼に逢ふのよ。……」

蝶次も傍から口を入れて、

「姐さんに氣象をして、二人で苦勞をする苦勞をするツて言つてゐながら、それは甘いところを精々見せ附けるんだからねえ、妙吉さんは……」

「いゝえ、つまりは矢張宅が面白くないからよ。」

妙吉は辯解するやうに、

「姐さんと兄さんが矢張氣になるのよ。それに、私だツて、あれが同居してゐると思へば、つい無理をして稼ぐ氣にもなるもんだから、座から遅く歸つて来て、私が居なかつたりすると、矢張氣持がわるいのよ。……私、何うかして、姐さんの許から別になりたいと思ふんだけど……、誰かお錢を借して呉れる人はないかねえ！」

わざと頓狂の聲を出した。

十三

「その後家さんツて言ふのは、それで、金持なの？」

「金持らしいよ。考へて見るとね、ある筈のないお錢を澤山持つてゐることがあるから、不思議だ不思議だと思つて居たら……皆な貰つて來るらしいよ。」

「それぢやお前さん、ぐづくして居ないで、たんと巻上げてお遣りよ。」

「そして奢つて貰つても好いわね……妙吉さんには随分聞かされたから。」

蝶次が笑ひながら言ふと、

「奢つて上げてよ。」

わざと投げつけるやうに言つて、そしてまた聲を落して、

「不思議ね、矢張、素人と同じね。そんな筈はないんだけど……役者にさういふお客が一人や二人あつたつて何でもない筈なんだけれど……矢張妬けてね。駄目ね。解るから、猶ほいけないわねえ。昨夜なんか癪だつたから、お座敷で酒を飲んで、荒れてやつたら、お客が吃驚してた……」

「ソウ災難ね、お客こそ……」

雪子も蝶次も調子を合せて笑つた。

「それに、いくらから見せつけるやうな氣もあるのね、男には。小田原だの、國府津だのから、繪葉書なぞをよこすんだから、猶、腹が立つわ……」

少し眞面目になつて、

「本當に詰らない、人がこんなに苦勞してるのに、あの人の爲めに、どんなに姐さんに氣兼ねしてゐるか知れやしないのに、かう思ふと、つくづく厭になつたから、今、出て來たのよ」

蝶次が、

「でも妙吉さんは、加藤の方が七分で、お前さんは三分だなんて言つてたぢやないの？」

「もう、アベコベになつちやつたのよ。もう此方が七分よ。」

妙吉はわざとおどけた顔をして、笑つて見せた。と、

「大變ねえ……」

かう雪子が呆れる。

「矢張、男に腕があるのね。」

かう蝶次が囁す。それがまた嬉しいといふやうな顔をして、妙吉は傍にある羊羹を取つてむしやく／＼食ひ始めた。

雪子も蝶次もかねてその役者を知つてゐた。ちん子姐さんのゐる藝者屋に入り込んで來る役者も役者だが、あゝいふ役者にあゝまであつくなる妙吉も妙吉だと二人は思つてゐた。

「妙吉さんに稼がせるつもりで、あゝしてあの加藤さんを家に入れたのね。あそこの姐さんはあれで却々しつかりしてるからね。それにくゝあの加藤さんもお給金をあらかた入れるんですツてね。つまらないわね。」

二人はこんな話をしたこともある。

「けども、矢張苦勞のある方が面白いのよ。」

「それはさうね。」

雪子は思ひ當ることが自分にあるといふやうに蝶次の方を見て、

「それから思ふと、私などつまらない！」

「雪ちゃんがつまらない！ そんなことがあるもんかね。雪ちゃんがつまらなくつては、つまる人はいはしないよ。好い旦那はあるし、三木さんはあるし……」

かう無遠慮に妙吉は言つた。雪子は笑つてゐた。

十四

「雪ちゃんは仕合せよ。」

「さう見えて？ 蝶ちゃんにも……」

「だツて、さうちやなくつて？ あんな好い抱妓は置いて貰うし……イヤなお座敷には出なかつたつて好いんだし、母さんはあの通りやさしいし……」

「他で見たやうでもないのよ、あれで。」

雪子はかう言つたが、自分の方に向いて來た話頭を轉じさせやうとするやうに、

「それはさうと、貞ちゃん歸つて來たんですツてね？」

「貞ちゃんか？」

それは蝶次にも妙吉にも初耳だツた。

「何時なの、それは？」

「四五日前だつて、一人で夜遅く歸つて來たんだつて……。直下に逢つたんぢやないから詳しいことは知らないけども、お隣の豊ちやんがこつそり行つて逢つて來たつて話して居たわ。お母さんが寝てると、戸をトントン叩く人があるんだつて……。それが十二時頃なんだつて、誰だらう。こんな遅くと思つてゐると、私ですよ、お母さんツて言ふ聲がね、何うしても貞ちやんの聲なんだつて。母さんびつくりしたつて言つてゐたさうよ。それも荷物一つ持たず、銘仙の綿衣一枚着た切りで逃けて歸つて來たんですとさ……」

「逃けて？」

「ぐづぐづしてると、雪が降つて、歸つて來られなくなるやうな處なんですつて……。それに、先でも離さなかつたんでせう。」

「だつて、仕合せだつたんぢやないのかしら？ 自分からもあんなに望んで行つたんぢやなく

つて？」

「矢張、駄目なのよ。」

「さういふもんですかねえ！ あんなに惚れて行つても……。つくづく考へるといふやうな調子で蝶次が言つた。」

「蝶ちやん、知つてるね、あの旦那？」

傍から妙吉が、妙にからんだやうに言ふと、

「二三度、逢つたことはあるわ。好いたらしい好い旦那よ……。何處でしたッけね。さう……。秋田の田舎よ。山を持つてる人だと思つたわ。」

少し途切れて、

「貞ちやん、それは大騒をして行つたんですがね。さういふものですかね。」

「だつて、それは淋しい處なんですと……」

かう言つて雪子はまた話を續けた。

「芝居小屋一つないッていふやうな田舎なんださうですからね。それに何處を見ても山ばかり話す人はなし、旦那はさう始終は家にはゐるす、終には泣きたくなつて、獨りで泣いてゐたことなども幾度もあつたんですつて……それで、雪が降れば、來年の四月までは何うしても歸つて來れないから、それで慌て、黙つて逃げて歸つて來たんですつて……さういふ田舎でも厭ね。」

「さういふ處が私は好きよ……好いわ、さういふ田舎が……。誰も居なくつて、誰も面倒臭いことを言ふ人がなくつて。私、出來るなら、さういふ處に行つて一人でもちつとしてゐたいわ。」

蝶次はこんなことを言つて、

「それで、貞ちゃんまた出るのかしら？」

「此土地ちやもう厭でせうけど、またいづれ何處かへ出るやうな話よ。」

「矢張、藝者は藝者ね……何時まで経つたッて駄目ね。」

蝶次は目を下に落しながら言つた。

十五

をりく三味線の音締めがして、灯が二階の高窓や格子戸の入口や塀の中の間などを明るく見せた。話聲や笑聲が何處からともなく聞えて來た。

不意に、闇の中から、

「今晚は。」

など、白くつきりした顔が聲を懸けて摩れ違つて通つて行つたりした。通りに添つた玉突場の硝子戸の中は、はつきりと手に取るやうに覗かれて、客が二三人、若い綺麗な妓を相手に、何か笑ひながら頻りに球をついて居るのが見えた。ある小待合の前では、俵が一臺、路に

幅をして置いてあつて、女達の騒ぐ氣勢が賑かに奥の方から洩れて聞えた。右の方の巷路にも、丸い軒燈が幾箇となく綺麗に並んで見えて居た。

チリ、ンと音がしたと思ふと、ゴム輪の俵が靜かに音もなく、その細い巷路へと入つて行つた。

「松枝姐さんの旦那！」

そのベルの音を聞くと、その巷路に住んで居る人達は、誰も皆なさう思はないものはなかつた。それほどその旦那はよく遣つて來た。殆ど毎晩のやうに遣つて來た。背の高い、何方かと言へば瘦削の方で、大抵は中折にインバネスを被つて、雪駄などをチャラチャラさせる方の人だつた。

「あれで、松枝姐さんより一つ位若いんですつて、何處か檜物町あたりの若旦那よ。まだ、奥さんが無いんだつて。さうねえ、さう好い男つて言ふほどでもないけれど……」

かう近所の若い妓達は噂をした。

時にはまた、

「松枝姐さんも若いわねえ。容色が好い人は得ねえ。あれで三十二とは何うしても思はれないわね……。一度子供を産んだことがあるのよ、あれで。それにあの旦那もやさしい面白い人だつてね。松枝姐さんが生憎お座敷に出てゐて、歸りが遅いと、何んなに遅くつても、酒も飲まないでチャンと待つてゐるんですつて……惚れてゐるのね。」

こんなことを岡焼半分に言つて聞かせる人達もあつた。

其處にも矢張年寄りのぐりく坊主の母親がゐた。元、吉原で藝者をしてゐたことがあるといふだけあつて、何うかすると、娘と旦那と三人一緒になつて、唄をうたつたり三味線を弾いたりカツボレを踊つたりして騒いで居ることなどもある。

「陽氣ね。此通りで松枝さんの家が一番陽氣ね。」

誰も皆さう言つて其前を通つて行つた。

旦那は朝早く屹度歸つて行つた。

「番頭や小僧の見せしめにならないから」

かう言つて旦那は眼い眼をこすりながら歸つて行つた。其時分は、その巷路の中では、眼を覺してゐる家などは一軒もなかつた。松枝の家ですら、何うかすると、俵屋の方に起されることなどもあつた。松枝は、年にも似合はない赤い色づくめの長襦袢の上にお召の派手な羽織を引かけたりなんかして、だらしない、しかし艶な様子をして、いつも上り端まで送つて出て行くのが倒になつてゐた。

「ぢや、今日もお早く。」

かう言つて、旦那を送り出してから、松枝は又元の床の中に入つて、午近くまで、ぐつすり寝込むのを樂みにしてゐた。

十六

その隣は狭く堀を取廻した新建の二階家で、南と西とを明けた欄干には、をりをり綺麗なお酌さんなどが四邊を眺めて立つて居た。かと思ふと、でつぶり肥つた四十五六の顔の白い紳士が、此の土地でも容色の好いのと、若い割に藝のあるのと、腕のある養母さんを持つたのとで評判な、二十位の妓と並んで立つて居るのを近所の人達はよく見かけた。

「お千代さんは本當に仕合ね。今ぢや土地でも一番好いでせう。」

その二階家の普請の始つた頃、土地の人々は皆なかう言つて噂をした。

「昨年の暮あたりは、お千代さんも随分困つてゐただけど……矢張養母さんがしつかりしてゐるからねえ。とんぼですつてねえ。出来たのは、彼處のお上さんと養母さんとの計略ですつてねえ。可哀相なのは桃千代さんよ。旦那を取られて何んな心持がしてゐるでせう。お千代さ

んと一座をしたら、餘り好い心持はしないでせうね。でも此間お座敷で一緒になつた時はさうでもないやうな顔をしてゐたわ……あれで、お千代さんも、中々腕があるんですツてね。」

「こんな話を其處でも此處でもしてゐた。その旦那は仲か自動車で遣つて来た。俵の時には何うかすると、松枝姐さんの旦那と間違ふやうなこともあるが、自動車の時には、それが、その狭い巷路に入らないので、其處の角から下りて、静かに肥つた體を運んで行かなければならなかつた。自動車が迎へに來た時などには、近所の子供達がいつもその周圍に集つてわい／＼騒いでゐるのが例で、ブツブツと音がすると、

「いら、觸つちやいかん。」

かう詰襟の洋服を着た若い運轉手が笑ひながら叱つた。子供達は、終にはその運轉手と懇意になつて、一人々々乗せて貰つたり何かした。すぐ前の家の十二三になる仕込の女の兒だの、

ねんねこで子を負つた子守だのが、運轉手を相手に笑つたり囁したりしてゐた。

その夜は松枝姐さんの旦那の俵のベルの音がしてから、間もなくその自動車が遣つて來て、一しきり騒がしい音をあたりに漲らせてゐたが、それもほんの少しの間で、あとはまたもとの静けさにかへつてしんとした……。と、何處かで三下りか何かを弾いてゐると思ふと、今度は妙吉の家から、太棹の賑かな音につれて、唸るやうな男の節廻しが聞えて來た。

蝶次の家にもめづらしく二階に灯がついてゐた。静かな話聲と爪弾の三味線の音とがをりをり微かに洩れて聞えた。

「廁から出て來た蝶次は、

「今のは、何處から。」

「矢張、鶴の家だよ。是非、來て呉れツて言ふから、少しひどく斷つて遣つたよ。いくら稼業でも都合で出られませんかツて……」

「イヤだねえ、本當に。」

そこからかけて来た客はよく知れてゐた。蝶次は長火鉢の角の處に蹲んで、鳥渡物思はしさうな風をしてゐたが、ふと、氣をかへて、

「妙吉さん、相變らずお對坐ね。」

誰に言ふともなく言つて、そして、トントン二階へと上つて行つた。

十七

ガラス障子を明けて入ると、男が、

「また懸つて来た？」

「え、。」

「行つて歩いて来た方が好いちやないか。」

「好いのよ。」

そんなことを言ふものではないといふやうな眼色をして、電燈の下にある餉臺の傍に蝶次は坐りながら、

「お客は屹度桃千代さんの知つてる人よ……ちき貰へるお座敷はお座敷だけれど。」

「行つてお出な。」

「イヤですよ。」

わざと蝶次は強く言つて、

「今日は何うかして？ 召上らないのね？」

「酒も澤山だ！」

「さう。」

蝶次は氣のないやうに男の顔を見たが、

「何だか、今日はつまらないのね?。」

「さうかねえ。」

「此頃は、貴郎、少し何うかしてるわね……。」

「何故?。」

「何故ツて、私のことなどもうそんなに考へて下さらなくなつた。」

「そんなことはない。」

「そんなことはないことはないわ。……その證據にはちつとも入らしつて下さらないぢやないの?。」

「少し忙しかつたんだ……。」

「嘘よ、……私など、屹度、もう何うでもよくなつたんですよ。」

男が黙つてゐるのを見て、

「私、本當に、此頃はいろくなことを考へるやうになつた……。何うして、世の中の人は、あゝして暢氣にして暮してゐられるんだらうツて。雪ちやんでも、政次さんでも、それは暢氣よ。聞いて見ると、別にいんから打込んだツていふやう人はないのね……。それでゐてあゝして面白く騒いで暮して行ける氣が知れない……。さういふとね、雪ちやんなんかいつも笑つてお前さん、さういふ氣でよく藝者をしてゐられるねツて言はれるのよ。さう言はれると、自分でも本當にさう思ふ。藝者氣質でばかりはゐられないやうな處があるんですね、矢張……。」

「さうだね、何うもさういふ風な處があるね。眞劍になりたくツて、そして眞劍になれないやうな處が——」

「本當にさう……。眞劍になりたくツて眞劍になれない? 實際、その通り貴郎はよく私を見抜いたのねえ……。」

言ひ當てられたのをつくづく感心したやうに、

「昨夜なんかそれは淋しかった。あんなに雨が降つたでせう。それにめづらしくお茶を挽いたでせう。隣の妙吉さんの許では例のお對座で義大夫が始まつてゐるし、松江姐さんの許では、母子三人で面白さうに騒いでゐるし、かういふ時に、誰か来て呉れ、ば好い、電話ですぐかけるやうなところがあれば好いと思つて、火鉢の角の處に黙つて坐つてゐたわ……でもね、妙吉さんのやうなのが羨しいツて言ふんぢやないんですね。あんなのはイヤですね、もつとしつかりした、心でも體ですつかり投出して、了ふやうなんでなくツちや……」

「だから、眞剣になれないんだ。」

「さうね。」

考へるやうにして、

「あ、本當に、しんからこの心を誰かにやりたい！ 藝者なんかつくぐ、イヤ……」

蝶次は左の手を額に當てながら、かう言つて頭を振つた。長く出た鬚は、明るい光線に微かに揺いた。

に揺いた。

十八

今日に限らず、蝶次はよくさういふことを言つた。

「誰か——誰か本當に私の心をすつかり受取つて呉れる人はないでせうか。」

さうかと思ふと、

「私もう二十四よ。身を固めるならもう固めなくつては仕方がない。」

こんなことをも言つた。

待合へ行つても、お座敷へ出ても、何方かと謂へば、元氣な、面白い、客を外らさない方であつた。

「蝶ちゃんか神經がわるいつて……。そんなことはない筈だがね……。そんな風なところは少

しも見えないがね。』

蝶次が一しきりヒステリイで寝てゐたとき、ある待合の女中は驚いたやうにかう雪子に言つた。

『私、そんな風に見えないでせう！ 面白い、つまらないことばかり言つてゐるやうに見えるでせう。苦勞なんかなささうでせう。それで、氣がふさぐのよ。もう、じつとしてゐられなくなるやうな氣がすることがあるのよ。何故でせうね。』

かう言つて溜息を吐くのが癖だつた。其時は、蝶次は屹度相手の顔を凝と見詰めて、髪を重さうに些し傾けて、さも重い心を持扱つてゐるやうな様子を見せた。

『つまらないわねえ。』

微かな溜息がまたそれに續いた。

男にはさういふ調子が氣に入つてゐた。何でも、大抵なことは眞面目に話して隠して立てをし

ないと言つたやうな調子が……。其處から引寄せられて、俄かに忘れられなくなつたことを男はをり／＼考へた。四五度逢つた頃には、もう離れられないやうな氣分になつてゐたことをも考へた。

清水との關係から、

『その位の世話は、僕にだつて出来る。』

かう男が息巻いて言つた。

蝶次に取つては、それが寧ろ不思議に思はれる位であつた。何處から何う運が向いて來るか解らないと言つたやうなものであつた。

『本當ですか！』

その時蝶次はさう言つて、身を男に寄せ懸けて行つた。

一間は静かであつた。鐵瓶の湯が微かな音を立て始めた。隣の太棹は際立つて冴えて四邊に

聞えてゐた。

「でも、まだ私は何うなるか解らないわねえ。貴郎と一緒にかうして何時までもゐたいと思つても、それは出来るか何うだか解らないわねえ。」

ふと気が附くと、蝶次はこんなことを言つてゐた。

「それは仕方がないよ。今二三年も経つと、誰かの細君になつて、大丸鬻に結つて、電車で逢つても、知らん顔をしてゐるやうな眼に逢ふのがどうせ落さ！」

「そんな私ぢやないけれど……」

「それはそれに極つてるよ。」

いつか男の機嫌は直つて居た。蝶次は酌をしながら、

「でも、本當に、人の奥さんにはなりたいたいと思つても、それはとても駄目だから、その方は思ひ切るけれど、本當に、いんから心を打ち込んで、生命も體もやるといふやうな眼に逢つて見

たいとは思ふわねえ。私など、随分男は知つてゐるけど、そんな氣になつたことは唯の一度だつてないんですからね。貴郎にだつて……」

かう言つて笑つて、

「でも、好きでなけりや、かういふお世話をして下さると言つたつても、お世話になれやしないけれど……」

十九

「だつて、お前などは、随分さういふ話を持つて居さうなものだかね。」

蝶次の言葉も氣にしないで、かう男が言ふと、

「それはいくらもありませけれど……駄目ですね、矢張……此方ぢや何とも思つてゐやしな

「さうかなア。」

「それに、矢張性分にありますねえ。政次さんのやうに箱屋と出来て、新聞にかかれても平氣でゐるやうな人もあるんですから……え？……さうですとも、すぐやめて了ふんですとも。今など、もう途中で逢つたツて、知らん顔をしてるわ。」

「さういふ風に手輕に考へてゐる方が好いんぢやないかえ？」

「それはさうですとも……私だつて、さうですけれども……」
ふと話を轉するやうに、

「さういへば、私、何處かへ行きたい。何處か靜かなところへ、二三日行つて居たい。行きませうよ。」

「何處へ行くんだえ？」

「海が好いわ。」

「こんなに寒くなつて來たのに、海になんか行つたツて仕やうがない。」

「ぢや、私、一人で行くから好い。」

蝶次は傍にある三味線を取つて、靜かに調子を合せ始めた。男は、猪口を一杯ぐつと干してから、笑ひながら、黙つて蝶次の方を見て居た。

蝶次は黒の襟のかゝつた瀧縞のお召に黒緇子の帯をキウと緊めて、爽然した、意氣な様子をを見せてゐた。常盤津の「辰橋」の中から「卯花白き」といふ處を少しばかり唄つて弾いてゐたが、それが濟むと、男の方を向いて、

「何かお唄ひなさい。」

で、男は都々逸や端唄を二つほど唄つたが、何となく調子が合はないといふやうな風で、すぐやめてまた話し始めた。

此處まで來ても、女の心持や秘密は、男にはまだ十分に分らなかつた。疑惑が絶えなかつ

た。清水に逢はないと言ふが、それは實際であるか何うか、それすら知らない。清水の方が或は餘計に女の胸を占領してゐるかも知れない。そればかりではない。その他に、女にはどれだけの男があつて、何ういふ風にそれがなつてゐて、何ういふ口の利き方をして、何ういふ嬌態をして、何ういふ風に男の心を取扱つてゐるかそれが一切知らない。中でも、殊に知りたいと思ふのは、自分がその中の何ういふ位置を占めてゐるかといふことである。時には、男はさういふ暗中摸索をすつかりやめて了つて、つとめて單純に、暢氣に解釋して了はうと思ふこともないではないが、さてそれが容易に出来ない……

男は女の話の中から、つとめてそれを探し出さうとした。
と、いつでも蝶次は、

「また始めてるのねえ、貴方は。本當に、貴方は自分で自分を苦しめてゐるのねえ……。もうおよしなさいよ。私なんか、大丈夫よ……」

わざとかう笑ひながら言つた。

二十

ある時、蝶次は何の氣なしに、永樂で清水に逢つた話をした。

男は黙つて居たが、眉のあたりの烈しく動いたのを蝶次はすぐ見て取つた。しかし一度言ひ出したことはもう何うすることも出来なかつた。腹では後悔しながら、

「でも、さういふ風に男の器量を下けてまで仰しやらなくつても好きさうなものね、私のやうなものに……」

男はむつゝりして黙つて居た。暫く経つても口も利かずに居る。

「怒つたのですか？」

かう蝶次が男の顔を見ながら言ふと、

「いや、怒りやせんけれど……、清水にはもう逢はないッて言ふ約束だったんぢやないか。」
男の聲は少し震へて居た。

「だから、私が行つて逢つたんぢやありませんよ……。誰だか解らないんだから、仕方がありませんよ……。私も、清水さんだと思へば行きやしない。」

何うだか解るものかといふ疑惑を男は胸に抱きながら、清水と自分と女とのことを考へて居た。清水があの時、友達らしい態度で打明けて呉れたら、こんなことにならなくても済んだのに……。などとその時のことをも頭に浮べた。

二人とも同じやうに黙つて居た。火鉢では鐵瓶が二人の心を更に深い處に伴れて行くやうに微かな静かな音を立て、居た。それは矢張り同じ二階であつた。其日は、男は日の暮れぬ中から遣つて來た。欄干に凭り懸つて、夕焼の赤い空などを見て居た。大きな建物の間からは、銅の金盃のやうな落日があかくと沈んで行くのが見えた。それを二人は夕暮の寒い空氣に震へな

がら立つて眺めてゐたりなどした。

餉臺の上に置いてある天ぶらは、男が好きだからと言つて、わざ／＼蝶次が通りの名高い天ぶら屋まで人をやつて買つて來たものだった。その日は二人とも、機嫌よく話してゐた……。

「それぢや……」

蝶次はこんがらかつた頭の中から漸く糸口をさがし出したといふやうに、

「ぢや、貴方、私、黙つてゐる方が好かつたのね？」

「話して呉れない方が好かつたかも知れない。」

「さう——」

蝶次は眞面目に、靜かに、

「ぢや、話さなければよかつたわね……。私はまた話さないで置いては却つてよくないと思つて？」

男はまた口を噤んで了つた。

暫くしてから、

「私^{わたし}がわるかつたわ。」

かう蝶次は言つて、

「私^{わたし}、つくづく稼業が厭になつた……何をしても……何んなことをしても好いから、こんな稼業はやめて了ひたい。」

やがて蝶次はそこから立つて、二階を下りて行つた。

そのことがあつてから、蝶次は決して清水のことを男の前では言ひ出さなかつた。男が氣にして聞きなどすると、

「清水さんの話は、もうしない！」

かう蝶次は言つた。

三十二

一軒、家を張つてからは、近所との交際が殖えて、何の彼のと面倒なことが多かつた。月番をふり割つた筋の入つた紙の表を檢番から持つて來たのを、母親の時計のかけておる柱の傍の壁に張つて置いた。

「家の番は來年の五月ね、清香さんの家と一緒にね。」

蝶次はその時かう言つて其の表を見てゐた。抱えから分け、それから看板借、何うやら彼うやら一本立になつたのは嬉しいけれど、それだけまた責任が重くなつて、空の財布を其處等に放つたらかして遊んで歩く譯には行かなかつた。

「本當に雪ちやんの言つた通りね。家を持つと、もとのやうにのんきなことばかり言つてゐられなくつてよ。」

蝶次はよくこんなことを言つて笑つた。

お座敷に出やうとて、箱の中から繻珍の綺麗な小さな財布を出して、それを帯の間に藏はうとして、ふと中を改めて、

「おや、もう、白鯛一つしきやない！ 母さん、おたからを少し頂戴な。」

「もう、ありやしないよ、お前。」

「もう、無いの？ 昨日のは？」

「昨日のは小間物屋にやつたぢやないか。」

「さうだつたわね。」

と少し頼りなさうな顔をして、

「ぢや、さつき、鳥屋から御祝儀が下つたわね。あれを少し頂戴な。」

「あれは、あそこにやるんぢやないかえ？」

「い、のよ。」

じれつたさうに、

「それまでには何うかするよ。」

こんな状景がをり／＼起つた。暮し向きの方は、さう大して骨が折れるといふほどではないが、目の見えないやうなところと思ひもかけない出錢があつた。従つて月末の拂ひはいつもかなりの高に上つてゐた。呉服屋が二軒——それが代る代る遣つて来て流行につれてのいろいろなもの座敷に並べて見せた。兩國あたりの名高い西洋小間物店の若い番頭は、かういふ姐さん方の家に長い間のお馴染になつてゐて、何の彼のと云つては、其時々流行品を置いて行つた。此間も蝶次はその男から今年の流行だといふ駱駝の襟巻を買はせられた。

それに自前になると何うしてもお座敷の数が減つて来た。評判のあつた妓だけに、蝶次はさう目に立つほどでもなかつたが、それでも自然断らなければならぬやうな座敷が多くなつて

来て、ついそこから客足が落ちて行つた。まだ若いだけに、大きな姐さんのやうに、思ひ切つた大膽な眞似も出来なかつた。

さうかと言つて——自前になつたからつて、お茶屋に由つては、餘り多く姐さんを振り廻す譯にも行かなかつた。無理なことも三度に一度は聞いてやらなければならぬやうなところもあつた。時には多くの姐さん方の中に交つて、口惜しいと思ふことをじつところへて居なければならぬやうなこともあつた。

「藝者になるなら、矢張、子供の頃から仕込んで、そして年頃になつて、好い旦那をつけて貰ふやうにしなくつては駄目ね。中途からでは駄目ね。」

蝶次はかう雪子や政次に話した。

二十二

蝶次は松の家といふ待合と、檢番の通りの澤木といふ藝者屋から電話を借りてみた。電話がかゝつて来ると、松の家からは、いつも肥つた女中が急いで駆けつけて言つて来て呉れた。澤本からはお酌が、

「蝶次姐さん、電話よ。」

かう表から聲を懸けて行つた。

澤本には、藝者が大勢居た。其處に行くと蝶次はいつも捉えられて、つい長座をした。此處の主人は土地での幅利で、それに藝者を買出しに地方に行くことが上手だと言はれて居るだけに、家に居る藝者にも何處か成たけ安くて、そして見せかけの好いと言つたやうなのが多かつた。澤のない顔をしたお酌なども居た。

「蝶ちゃんなんか好いわねえ。」

其處から此處へと渡つて歩く中にいつか卅二三になつて了つたといふやうな、色の淺黒い、

髪かみの薄うすい妓せんはかう言いつて、羨うらやましさうに蝶てうじ次じの色いろの白しろいつやくした顔かほを見みた。中なかには、酒さけが好すきで酒さけが好すきで、お客きやくがすぐ盃さかづきをさして呉くれるやうなお座敷ざしきでなければ出て居ゐられないと言いふやうな妓せん達たちもあつた。蝶てうじ次じはよく其處そこで話わし込んで了しまつて、菓子かしを買かつたり鮎あしを取とつたりして御馳走ごちそうをして遣やることなどもあつた。時ときには、肥ふつた主人あかじが其處そこに出て來きて、

「何どうですな、好いい、安やすいのがありますが、一人ひとり置きませんか。これなら、好いい方の玉たまですとも……。これで、抱かへなら二五にいご、分わけなら四百位よひゃくぐらゐだつて言いふんだが——」

など、言いつて、丸顔まるがほの、眼めのぱちりした、しかし丈せいの低ひい妓せんの寫真しゃしんを見みせたりなどした。

ある日ひ、蝶てうじ次じが電話でんわを借かりに行ゆつて、ハンドルハンドルを廻ましてゐると、

「蝶てうじちゃん、あとで話はなしがあるよ。」

藤吉とうきちといふ此家このうちでの老妓らうきがかう傍そばに來きて言いつた。蝶てうじ次じはこの女おんなと仲なかが好よかつた。

「何なにアに？」

電話でんわをすましてから、蝶てうじ次じがその傍そばに行ゆくと、藤吉とうきちは、

「お奢おごりよ。」

かう言いつて笑わらつてゐる。

「何どうしたのさ？」

繁代しげよといふ藝者げいしやまで笑わらつてゐるので、蝶てうじ次じはかう追おかけて聞きかずには居ゐられなかつた。

「屹度きつぷ、奢おごるかえ？」

「そりや奢おごるわ。」

「本當ほんたうねえ？」

幾度いくども駄目だめを押おしてから、藤吉とうきちは新聞紙しんぶんしに包つんだ包づかみを持出も出した。明あけて見みると、中なかから此頃このころ流行りうかうする大島お召おほしめが一反たん出て來きた。ガラガラの好いい色氣いろけの好いい……。

「好いいガラねえ。」

思はず蝶次がほめると、

「蝶ちゃんにやつて呉れッて言ふのよ、これを。」

「私に——誰が？」

「だから、奢んなさいッて言ふんだよ。」

藤吉は笑ひながら、

「嘘だよ。かつぐ積りなんだよ。」

蝶次も笑つて、

「だッて、そんなもの貰ふやうな人はない筈だもの。」

「本當かえ？……それなら好い、私が貰ふから。」

藤吉は仕舞ひにかゝつたが、わざと大きく、

「なら、教せて上げませうかねえ！ 家の安どんがあつちから歸つて来て、小林さんに逢つて

来たんですとさ！」

二十三

「何時歸つて来たの？ 安さん？」

「昨夜、歸つて来たのよ。矢張、上方にも旨いことがないんだッて。歸る時に、小林さんに逢つたら、これをよこしてね、手紙も何もやらないけど、達者であるからよろしく言つて呉れッて言つてよこしたんですとさ。」

「さう……」

蝶次は顔をボツとさせて、その「さう」を少し長く引張る。

「それから、詳しいことは、安さんに逢つて聞いて呉れッて、ことづけられて来たッて言つて居たよ。」

「安さん、今、居ないの？」

「鳥渡、用があつて、其處まで行つたわ。」

かう傍から繁代が言つた。

「重大に奢つても好いね。」

藤吉はわざと調子を大きくして言つた。

「それは、奢るわ。」

暫くしてから、藤吉が、

「何時だつたらう。去年？　もう一昨年かね。随分、騒ぎだつたね。」

その時分を思ひ出すといふ風をして、

「お前さんも若かつたねえ。あとから上方までこれを遣つたんだからね。」

と、男の後を追懸けて行く身振をして見せた。

「あの時分は、夢中だつたから。」

蝶次もいつか其時分を思ひ出してゐた。

「蝶ちゃん小林さんに逢つたのは、あの時が始めてね……そら、浪花亭に上方の素人義太夫が懸つて、あの人が酒屋か何かをやつた時ね。」

繁代が藤吉と顔を見合せながらかう言ふと、

「え、さう。」

と蝶次も笑つて軽く點頭く。

「まだ、春勇姐さんの居る頃ね。春勇姐さんからあの時随分聞いたわ。春ちゃんも、いくらか氣があんたんぢやなかつたの？」

「さうかも知れない。」

蝶次は笑つてゐる。

「春ちゃんもあの頃は、随分はしやいで居たからね……」
藤吉が語の調子を合せると、蝶次は、

「さう言へば、可笑しかつたわ。私ね春勇さんと直下談判をしたことがあつてよ。佃月の廊下でね、あの隅の處に立つて……可笑しいわね、今考へると、「ぢや、何うでもおしよ。」かう言つて、春勇さんふいと向ふに行つて了ふんだもの。ふだん、仲が好かつたから、あれで済んだもの、大抵な人なら仲たがひね。」

「だって、仕方がないやね、小林さんの方の心だつてあるもの。」
「ちやうね。」

繁代は意味ありさうに笑つて見せた。

其處に、電話がチリ、ンとかゝつて來たので、繁代が立つて行つた。それを好い機会に、「ちや貰つて行くわ。」

その新聞包を取つて蝶次が立ちにかゝると、

「ぢや、お前さんの方からもお禮をよく言つてやるわねえ。」

「え、え。」

「餘計なことを書いてやつちやいけないよ。」

わざと聲を高く、

「今度はアベコベに男の方から追かけて來ると、事、面倒になるからね。」

「え、え。」

蝶次は笑つて出て行つた。その頃、清水と深い關係であつたことを蝶次は歩きながら思ひ出してゐた。

安どんは小林さんのことを詳しく話して聞かせた。南の方にある別荘にも行つて見た。其處にはめづらしく小林さんのお上さんが来て居て、三人でいろいろ東京の話をした。姐さんが自前になつたことも、誰から聞いたか知つて居て、その中、お祝をするなど、言つて云た。安どんは續いて自分の失敗した話などをして聞かせた。

南の別荘も西の本宅も蝶次は皆なよく知つて居た。停車場前の旅館から、取敢へず電話をかける、始めは番頭らしい丁寧な口の利方をする男が出て来た。

「若旦那はんは、今、ちよつと居りませんが——貴君は何方どす？」

その電話はかう言つて切れた。蝶次は氣が氣でなかつた。三十分位間を置いては、三度まで續けて電話をかけて見た。

「私？ 解つて？ 私、今停車場前に居るのよ。さつきから、電話を何遍おかけしたかも知れないのよ……え？ さう、此の前の汽車で来たの……。ちや、ね、すぐ来て下さるわね。」

やがてその惜しいなつかしい電話は切れた。蝶次はそわ／＼と唯座敷中を歩いてゐた。車の音がしさへすると、何遍も二階から下りて行つた。

中庭に泉水が出来てゐて、大きい小さい緋鯉が澤山其處に泳いで居た。待ちくたびれて、蝶次が欄干の傍の柱に凭りかかゝるやうにして、ぼんやりそれを見て居ると、折れ曲つた廊下の向うから、鼠の中折を冠つてへこ帯に金ぐさりをからませた小林さんが急いで遣つて来た。

「まア、貴方！」

蝶次は思はず聲を擧げてその傍に駆け寄つて行つた。

で、二人は其處で午飯を食つて、勘定をすまして、今度はもつと静かな世離れた旅館へと行つた。それは遠く築港の方まで見るといふやうな位置にある旅館で、斜阪になつた花壇には、綺麗な草花が一面に見事に咲き揃つてゐた。離れの六疊には、茶がけの氣の利いた幅物に大輪の白い菊が一枝生けてあつた。

蝶次はその旅館に三晩泊つて居た。芝居も見に行つた。此土地に來れば誰れも聞きに行く名高い太夫の出るなにかし座へも行つた。蘇鐵のある大きな寺や、反橋のある名高いお宮や、一萬噸以上の大きな船のかゝつて居る築港の埠頭や、其他名高いところへは、いつも一緒に伴れ立つて出かけて行つた。小林さんのお店の前を通つたのは、たしか新地の遊廓を見に行つた晩の歸途であつた。いかにも老肆らしい大きな呉服店で、電氣のついた明るい店頭には、番頭や小僧が景氣よく客に反物を出して見せてゐた。二人は知らぬ顔をして其前を通つて行つた。

「大きなお店ね。」

わざと店先近く歩いて居た蝶次が、其處を通り過ぎてからかう男に言ふと、

「何アに。」

男は碌に返事もせず、スタク／＼先に立つて歩いて行つた。

二十五

初めて逢つた夜のことがいつか蝶次の眼の前に浮んでゐた。其日は清水が午後から來てゐた。歸途は一緒に車を並べて、いつもの角で、

「御機嫌よう。」

と言つて別れて來た。まだ漸く日が暮れたばかりであつた。其處へ、春勇さんが、「蝶ちゃん、浪花亭に行つて見ない?。」

かう言つて誘ひに來た。

浪花亭の前には、酸漿提燈が綺麗に點いて、大勢人ばかりがしてゐた。

「素人とは思へないね。矢張、上方の人は違ふねえ。」

かういふ讚辭は到る處で聞えてゐた。春勇も蝶次もすつかり聞惚れて了つた。殊に、中頃に

出た量のある聲を持った人の鷹揚な「酒屋」の一段が、中でも一番二人の心を惹いた。

「あれが小林さんって言ふ上方の呉服屋の若旦那よ。家の旦那がよく知ってる。」

春勇はかう蝶次に囁いた。

「ちや、彌助か何か、持たしてやりませうよ。ね。」

蝶次はかう言ふほどそれほど其方に心を惹かれてゐた。春勇はさうすれば、向うでも義理で口をかけて呉れるかも知れないと思つてゐた。で、二人は壽司を樂屋に持たせてやつた。

果して其夜口が懸つて來た。もう十一時を過ぎて居た。それは瓢家といふ、奥深いヒツソリとした待合であつた。其人だといふことはすぐ知れた。春勇さんも一緒だと箱屋は言つた。

蝶次が行つた時には、春勇はまだ來てゐなかつた。

「お座敷は何處？」

かう帳場で聞いて、長い廊下を歩いて行つた蝶次の心は、何故か夥しく躍つた。角帯を緊め

た客は、奥の間に獨りぼつねんとしてゐた……。

かと思ふと、蝶次の眼の前には、もうさうした光景はなくなつて、今度は清水のことがありごとと思ひ出されてゐた。上方へ旅に出かけて行つた留守に、清水は三度までも行きつけの待合に電話をかけてよこした。上方から歸つて來ると其處のお梅さんといふ女中が、

「蝶ちゃん、何處を浮氣して歩いてゐるんだね。清水さんから電話がかつて來て、私は困つたよ。三度目の時には、行つた處が解らない筈はない、是非知らせろつて仰じやるんだもの、私や本當に困つた。」

と笑ひながら話した。さういふところから、其話が段々清水にも知れて行つた。清水は怒つたり何かした。

新聞にも二度ほど出た。一度は洒落た文句入で一段半も書かれた。

一時は蝶次の方でもかなり深く打込んでゐた。店の用で、男が東京に出て來ることなどがあ

ると、途中から屹度電報を打つてよこした。と、蝶次の方でも、その時刻までには屹度停車場まで迎へに行つてゐて、一緒につれ立つて、海の近い旅館へ行つたり何かした。「家を持たない時の方が、結局浮氣が出来て面白かつた。あの時分なら、電話で檢番に知らせ置きさへすりや、二晩や三晩は明けたツて差支はなかつただけけれど……今はもうさうは行かない。」

それに、周圍にゐる人達が段々月日の経つにつれていろいろに變つて行くのも蝶次には不思議だつた。

二十六

表の格子戸が威勢よく明いた。

「どなた？」

かう聲をかけても、返事がないので、蝶次はそのまま立つて行つた。其處には思ひもかけない清水が立つてゐた。

「あなたなの？」

蝶次は困つたやうな顔色をしたが、思返したといふやうに、

「まア、お上んなさいな。」

「好いかえ、上つても……」

かう言つた清水の顔には、稍々打解けた微笑が漂つてゐた。二三日前にも、永樂で蝶次は清水に逢つてゐた。

母親が鳥渡挨拶をして、勝手の方へ引込んで了ふと、蝶次は、

「何か用？」

「い、や、用ツて別にないけれど……」

蝶次の顔を見て、

「一度位、君の家を見に来たッて好いだらう？」

「それは好いわ。」

蝶次は打解けずにいる。

「すつかり、立派な藝者屋になつちやつたね。」

清水はかう言つて四邊を見廻しながら、袂から敷島を出して、それに火をつけた。薄い紫の煙がすうと立颯つた。

家を持つについて、新に買ったらしい箆笥だの、鏡臺だの、時計だのが目に立つて見えた。「僕も、何か祝つてやらうか。」

など、言つたことを清水は思ひ出してゐた。

木川のこと口に上りかけたが、それでも清水は一生懸命にそれを押へた。

茶箆笥の柵から、栗田焼の急須を取つて、茶栓で茶を罐からすくつて、そしてそれに湯をさして、茶碗について出すまで、清水は打解けない蝶次の顔をじつと見てゐた。

「今日は何うかしてゐるね？ 気分でも悪いのかえ？」

「いゝえ。」

「でも、イヤに顔の色がわるいちやないか。」

「さう……」

「何うかしてゐるんだよ。」

「さうかも知れない、私だッて、苦勞があるから。」

矢張濟してゐる。

暫くしてから、

「でも、困るわ。」

かう蝶次が思はず知らず言ふと、

「何が——？」

「でも、あれほど言つて置いたぢやありませんか。私の家へなんか来ては困るツて、あれほど言つて置いたぢやないの……そりや、他の人なら構ひやしないけれど……もしか、逢つたら、何うして？ 貴郎だツて、氣まづい思をしなくつちやならないおやありませんか。」

「解つてるよ。」

「貴方ばかり獨りで飲込んでゐたツて駄目よ。」

蝶次は清水の顔を見て、

「さういふ筈だつたんだから。」

清水は少し激して、

「大丈夫だよ。奴に逢つたツて構ひやしない……。」

「私が困るわ。」

二十七

「困つたツて仕方がない。」

「ぢや、貴方が私を困らせる積り？ それならそれで好いわ。」

いよく眞面目な調子になつて、

「貴方も随分無理を言ふわね。かういふ風になつたのは、始めは皆な貴方が爲たんぢやなくつて？ 私だツて、義理ツて言ふことがありますからね。本當なら、貴方に御目にかゝつて居るのさへ濟まないつていふやうな氣がしてゐるんですけれど、貴方が此間のやうに仰しやるから……」

猶ほ言はうとするのを、清水は遮つて、

「解つてるよ。そんなことを言はなくても好いよ。俺がわるいんだよ。」
煙草をスバスバ吸つて、

「俺だって、もう、そんなに長くお前を苦しめやしないよ。俺だって、もう考へては居るんだよ。お前の心持だつてよく解つてゐる……」

「私だつて今更そんな愛憎づかしを言ふんぢやないんですけども……かういふことになつて了つたんですから、此間、言つたやうにして頂かなくつちや、私だつて困りますからね。」
「解つたよ。」

かう言つて、清水は顔をそむけた。

二人は暫し黙つてゐた。
清水は急に、

「鳥渡、話したいことがあるんだが、お前、一緒に出て呉れないか。」

さういふ男の顔から、何物をか霞まうとするやうに、蝶次は、じつと見てゐたが、

「今日はおよしなさいよ。」

「いや、本當に、聞いて貰ひたいことが少しあるんだ。今日もいつもの處からかけやうかと思つただけけれど……實はお前に言はれるまでもなく、此處にかうして直下に来るツて言ふことも厭だつただけけれど……お前が家に居ながら、居ないなんて言はないこともないと思つて遣つて来たんだ。本當に、手間を取らせないから、一緒に出て呉れないか。」

「そりや行つても好いけども、今日はおよしなさいよ。」

「いや、是非、聞いて貰ひたいことがあるんだ……」

「ぢや、此處で仰しやいな。」

「此處で話すやうなことぢやないんだ……」

勝手の方に領をしやくつて見せて、

「それに、母さんもゐるし……」

「何處に行くの？ それで。」

「何處でも好い、永樂でも何處でも……」

「今日はおよしなさいよ。」

「いや、是非、一緒に行つて呉れ。後生だから……もう、今度ツ切り、お前にも無理を言はな
いつもりだから。僕もこれまで随分無理を言つた……」

「さまざまのことを思ひ出すといふやうに溜息をついて、

「僕は、かういふ話をお前にするやうにならうとは思はなかつた……。樂しかつたことは皆な
昔になつて了つた……」

「何うしたの？ 一體。」

蝶次は思はず言つた。

二十八

無理に誘ひ出して置きながら、清水はその話を蝶次に容易にして聞かせなかつた。清水は唯
酒を呷つた。

「何うしたのさ、貴方？」

後には蝶次の方から促した。

清水は盃を餉臺の角の處に置いたまま、額に手を當て、長い間じつとして居た。顔は蒼白
かつた。

「何か、話すことがあるツて、何うしたの？ 貴方？——何か心配になることが出来たんです
か。」

「まア、好い、もうちつと経つてから話す！ まア酌をして呉れ。」

冷えた盃をぐツと干して、それを女の方に出した。

「そんなに召上つては毒ですよ。」

かう言ひながら、蝶次の酌をした盃を一口飲んで、

「しかし、もうお別れだから。」

「何うして？」

「何うしてツて、別に譯もないが、何うしても別れなくつちやならなくなつたんだ……もう、僕も駄目だ。」

「何故なの？」

「その譯は話さないでもちきわかるよ。」

かう言つて、清水はまた額に手を當てて、深い考に沈んだ。

「何うかしたの？ それなら、本當に話して下さいよ」蝶次の顔には、眞面目な表情がそれとなくあらはれてゐた。

「しかし、話したツて、つまらない。平凡なことだ。何うせ、物笑になるばかりだ。けども、かうして、此處で、こんな待合の間で、こんな冷えた酒を飲みながら、お前と、一生の別をしやうとは思はなかつた。それが残念だ……」

「一生の別？ 何うしてそんなことを言ふの？」

「譯は話さない。話さないでもちき解るよ。」

「でも、話して下さいよ。」

「實は——」

と言ひかけて、少し躊躇して、思切つたといふ風に顔を上げて、

「實は、女房とも別れて來たんだ！」

「奥さんとッ。」

「さういふことになつたんだ……。鼻はそれと知らないから、子供を相手ににこにこしてゐた……。俺は鳥渡お湯に行つて来るからッて、手拭と石鹼箱とを持つて、そして家を出て来た。永久に歸らない家を出て来たんだ……。少し呼吸をはずませて、」

「鼻と別れるのよりも子供と別れて来るのが辛かつた。よくさういふ處を芝居ですが、そんなもんぢやなかつたよ、子供は縁側の處で遊んでゐたつて。まゝごとの小さな鍋だの釜だのを並べて、何か一人言を言つて、障子に向いて遊んでゐたつて。それを見ると、僕は堪らなく悲しくなつたから、急いで出て来た……。」

「何してそんなことをしたの？」

「だッて、さうするより他に仕方がなくなつたんだ。僕は身をかくさなければならなくなつた

んだ」

二十九

「何うして、そんなことになつたの？」

「何うしてッて、矢張自業自得さ。身から出た錆さ。身をかくさなければ、社會に生恥を曝さなければならぬやうな身の上になつて了つたんだ……。鼻はまだ知らないから、何うしたんだらうッて心配してゐるだらうが、もう歸ることなどはありやしないんだ。僕の顔を二度と見ることが出来ないんだ……。」

「貴方死ぬ積なの？」

屹とした聲で蝶次が言つた。

「イヤ、死にやしない……。そんなことはしない。僕も男だ。何んな苦しい中でも生きてゐて、」

この不名譽を恢復しなけりやならない。」

「私かわるかつたのね。」

暫く互に押し黙つた後で、蝶次は眞面目な調子で言つた。清水の言葉から判じて見ると、長い間ごまかしてゐた金の詮議が會社で始まつて、その秘密がすつかりばれて了つたらしかつた。その金も尠ない額ではないやうな口振であつた。

「何うすることも出来ないんですか。もう？」

暫く考へてから、蝶次が言ふと、

「もう、何うしても駄目だ……。身をかくすより他に仕方がないんだ……。でも、お前のことは忘れない。お前と、かうして別れたことは忘れない。お前も、清水といふ男があつたといふことを忘れて呉れては恨みだぜ。」

堪らなくなつたといふやうに——相手は何う思つてゐても、この自分の漲る心を渡かすには

居られないといふやうに、清水は女に身を寄せかけてその手を握つた。熱い涙が男の頬を傳つて落ちた。

蝶次もいつか誘はれて涙組んで居た。

「私かわるかつたんですから、堪忍して下さいね。」

氣が付くと、蝶次はこんなことを言つてゐた。

男は蝶次の膝に頭を乗せて、大きな眼を明いて、天井をじつと見詰めてゐた。その眼からは大粒な涙がをりをり頬を傳つて流れた。蝶次も手巾をその眼に當て、居た。

「私かわるかつたんですからね。」

蝶次は男の體を揺るやうにして幾度となく言つた、蝶次は木川のことを思ひ出してゐた。

「僕は木川のことなどは思つてはしない。あれはあゝいふ風に自然に出来て行つたんだから、仕方がないと思つてゐる。……お前が本當に木川を思つてゐるなら、二人で仕合せに暮して行

くのを僕も心から望んでゐるんだ、木川だって、一度は僕の親友だったんだ。」

「い、え。」

蝶次は頭を振つて見せた。

「い、え、さうぢやない……」

再び言はうとしたが、何うした加減か、漲るやうに涙が溢れて来て、その言葉を遮つて了つた。

三十

「い、え……い、え、私は木川さんなんか思つて居やしない」

續いてかう言つたが、胸が一杯張詰めてゐる自分の心持が十分に現はせないのを捂かしさうに、

「何故、もつと早く話して下さらなかつた！」

「もう駄目だ」

「で、貴方、何うするつもりと」

「仕方がない、何處へでも、外國へでも、隠せるだけ身を隠して了ふ積だよ」

かう言つて起直つて、

「自分が身を隠して了ひさへすれば、會社の方でも起訴することを思ひとまつて呉れるかも知れないからね。僕に同情してゐて呉れる友人も二三人は居るんだし……現に、その中の一人なんか、その位の金なら、何うか出来さうなもんだつて言つて、心配して呉れたものもあつたんだから。」

「何うかならないの？ その人達に頼んで？」

「他人に迷惑をかけるのはイヤだし、それに自分で悪い事をして、それを他人に何の彼のと言

はれるのも厭だからね。僕は覺悟をして來たんだ。噂や子供が可哀相だけれど、噂の里は何うか彼うかしてゐるんだから、世話をして呉れるだらうと思ふよ。僕の噂だつて、僕のやうな男を亭主にしたのが不運だと思へば、れであきらめられないこともないからね。それに、まだ若いから……」

不意に、

「しかし、もう歸る、この事は當分誰にも言はずに置いて呉れ」

「まア、もう少し。」

蝶次は慌て、縦るやうにして留めて、

「もう少しして下さい。」

「だつて、いつまでかうしてゐたつて仕方がない。」

「でも……」

半起した男の身を再び無理に餉臺の前に座らせて、そして蝶次は黙つてじつと男の顔を見てゐた。自分の爲めに長い間、心を注いで呉れた男の顔を……。明日から見たくももう見る事の出来ない男の顔を……。と、不意に二人の間に、離れ難ない一種の情緒が烈しい力で起つて來た。清水は兩手を顔に當てた。

……それから一時間程経つた後には、清水はもう居なかつた。別れのキスを取換した室から、逃る、鳥のやうにして男は急いで出て行つた。廊下まで蝶次が追かけて行つて、

「ちや、御機嫌よう。」

かう小声で言ふと、

「お前も仕合せで……達者で」

かう言つて、男は二歩三歩戻つて來て、ギウと手を握つて、女の顔をほの暗い闇に見て、そして急いで向うに行つて了つた。女中と蝶次とが送つて出た時には、そのインパネスに中折帽

を冠つた姿は、もう闇の中に見えなくなつてゐた。

八ツ手の白い花の闇に見える縁側の柱の處に、蝶次はやや暫く立つてゐた。と、其處に來た女中が、

「蝶ちゃん、何うかして？ 今、電話よ」

「何處から？ 檢番から？」

「え、さう」

蝶次は電話口に行つた。

「さう？ 折角だけでも、斷つて頂戴な……。私、何だか、今日體の具合が悪いから。」

かう言ふのが此方にも聞えて居た。

蝶次はまた縁側の處に來て立つてゐた。

三十一

正月は流行の千羽鶴を崩した裾模様の春着に大きく松の模様の出た帯を緊めて、りうとした扮装で蝶次は座敷に出た。お約束の數もかなりに出來て、家の長押に張つた紙には、七草過まで平均四座敷はしなければならぬやうになつてゐた。中には十日、一週間とつけて呉れるやうなお客も二三人はあつた。

お茶屋では、床の間に大きなお供餅を飾つて、日の出に鶴の三幅對を懸けて、輪竹と松とを大きな支那焼の花瓶に生けた。そしてお馴染の客が來ると、丁寧に女將が挨拶に出て、あとから女中が屠蘇を運んで行つた。豆、ちよろぎ、わかさぎなどを物々しくかさね重箱から取つて古風な鐵の銚子から蒔繪の扁平たい三組盃に滴らすやうにして酒を注いだ。さうして正月の祝儀を濟ましてから、別に定められた室へと客は伴れられて行つた。其處には、お約束の藝

者達が、白襟に出の衣裳で、ぞろりと揃つて並んで進へた。

客は袴を穿いたり、フロックを着たりして遣つて来た。お目出度うといふ言葉が先づ何遍となく繰返されて、それから姐さんから順々に並んで、三味線が三人、唄が三人といふやうな順序で、あつさりお座附がすむと、今度は綺麗なお酌が扇子を持つて立つて、その土地で出来た今年の正月の新曲を踊つた。

さういふお座敷には、大抵旦那筋の客が多かつた。春子さんの旦那、奴さんの旦那、お照さんの旦那——さういふ席へ蝶次はいつも聘ばれて行つた、お照さんの旦那は、肥つた、もう小鬢の白い、五十位の紳士で、自動車を茶屋の門前に待たせて置いて、あつさり騒いで歸つて行つた。春子さんの旦那は、芝あたりの大きな寫眞屋さんで、藝事が好きで、撥を持つたり、好い聲で歌澤を唄つたり、酔ふと手拭で鉢巻をして、替間も蹴足といふやうな巧みな踊ををどつて見せたりした。奴さんの旦那は、名高いお役人さんで、その嚴めしい顔は、よく新聞などで

見て知つてゐた。

「奴さん、厭がるのも無理はないわね。あの若さで、あのむづかしい氣の詰るお座敷ですものねえ。何んなに豪い方でも、何んなにお金があつても、あれでは奴さん、可哀相ね」

などとあとで皆なで噂をした。

三ヶ日は賑かに忙しく過ぎた。細い巷路にも、三味線の音が到る處でして、笑聲が其處此處から洩れて聞えた。門松にかけた注連が白く見える格子戸の前には、これからお座敷に行かうとする仲が、姐さんの準備の出来るのを幾臺も待つてゐる。切火の音がカチカチと景氣よく聞えた。

「今年の春は賑かだわね。」

襦を取つた藝者達は、こんなことを言つて忙しさに歩いて摩れ違つて行つた。

七草の夜は、矢張前からの約束で、あるお茶屋に蝶次は行つてゐた。それは雪子も蝶次も平

生聘ばれてゐて、それで無事で居るといふやうな、暢氣なことはかり言つて騒いでゐる面白い客であつた。その夜は他に一本になり立ての若い妓が二人ほど聘ばれて來てゐた。で、蝶次は一時間ほどいろいろなものを弾いたり歌つたり饒舌つたりして、少し疲れたので、後を雪子にまかせて、帳場の方へと遣つて來た。

三十二

其處に夕刊が來てゐる。

「花柳たより、」など、いふところを何氣なくひろけてゐた蝶次は、ふと、ある記事に邂逅して、急に眞面目になつて、熱心にそれを讀みつゝけた。始めは片手を長火鉢に、片手を壁につけて、襟のところから長い髭を見せて、低頭したまゝで見えてゐたが、中途から、新聞を小さく折つて、起き直つて、心も身も全くそれに引入れられたやうにして讀んだ。

徳利を入れた銅壺からは、湯氣が絶えず白く騰つてゐた。その向うに、蒼白い蝶次の顔が、くつきりと長い間動かすに見えてゐた。

一度讀んだのを、氣が附くと、いつかまた二度讀み返してゐた。

其時、帳場には誰も居なかつた。新らに來た客の席に、女將は挨拶に出て行つて、其處からいつもの賑やかな笑聲が聞えて來てゐた。蝶次は、ソツと新聞を傍に置いた。重い重い長大息が出ることもなくひとり手に出て來た。自分の名が引合ひに出されてゐないのが嬉しいやうでもあり、不安なやうでもあり、罪なやうでもある……。と……。房州のさびしい海岸、泊り客も餘りないやうな旅籠屋、其處で名をかくして一週間ばかり泊つてゐた清水が、刑事に踏込まれて包み切れずかくし切れずに捕へられて行つた状景が、新派の芝居でも見るやうに、歴然と蝶次の眼の前を掠めて行つた。

「それでもあれから二十日の上になる」

蝶次は別れてからの日数を胸の中で數へて見た。

細君のこと、子供のこと、が氣の毒なやうに同情して書いてあつた。それが蝶次の頭に烈しい力で集つて來た。今までにさういふ經驗に選合したことがないだけに、一層深く強く心を動かさずには居られなかつた。

「私かわるいんだ！」

かう思つたが、すぐ續いて、かういふ稼業をしてゐる罪の深さといふことが染々と感じられて來た。

「何んなに、あの奥さんが、私を恨んでゐるだらう！」

蝶次は自分の名の出で居ないのを喜んだ心を恥ぢた。

「奥さんの許にお見舞に行かなければ義理がすまない……。早速明日行かう。」
こんなことを考へて見たが、それは到底實行されないことだといふことは心の底でよく知つ

てゐた。蝶次の心にはまたいつか男がさう決心してからの二十日間の心持といふことが考へられてゐた。

「何んなだつたらう！」

蝶次はかう思つて黯然とした。

清水のことに就いては、木川は流石に同情した口の利き方をした。しかし競争者のなくなつた喜悅は、その時の態度に名残なく見えてゐた……。それを蝶次はまた思ひ出してゐた。

爛のついた徳利を取りに來た年増の女中が、

「蝶ちゃん、何したの？」

「鳥渡、考へたことがあつたのよ。」

かう言つて笑つて、その儘立つて座敷に行つた。
座敷では、雪子が賑やかに三味線を弾いてゐた。

「おい、何しへ行つてるんだえ！」
など、酒に酔つて赤い顔をした客が蝶次の方を見て言つた。

三十三

二月のある寒い日に、土地でも名高い待合からかゝつて、蝶次が出かけて行つて見ると、姐さんが二人、若い妓が三人、帳場で長火鉢を取り巻きながら、何か頻りに饒舌つてゐた。「お客さん、まだなの？」

蝶次は上にあがりながら、

「大急ぎつて言ふから、お湯にも入らないで急いで来たのよ……寒いわねえ。」

「まア、お當りよ。」

平生よく世話をして呉れる喜代次姐さんが、かう言つて席を譲つて呉れたので、蝶次は桃千

代と秀奴との間に座つて、つめたくなつた手を火鉢の上にかざした。

「寒いわねえ。」

「でも、蝶ちゃんなんか、肥つてる方だからそんなでもないのよ。私なんか寒いわ、痩せてるから。」

丈のすらりとした秀奴が傍からこんなことを言ふと、

「痩せてたつて肥つてたつて、寒いのは同じよ。」

「あら、さう。そんなことはないわ。家のお母さんなんか、肥つてるから、ちつとも寒くないツて言つてよ。」

「でも、私、肥つてるても、矢張、寒がりんぼよ。」

外の方を見てゐた桃千代が、急に、

「あら、雪よ、姐さん！」

かう言つたので、皆の眼は一齋に外の方に向いた。小さな雪片が成ほど時々白く空から舞つて落ちて來てゐた。

「寒い筈ね。雪が降るんだもの。」

喜代次が、いかにも寒むさうに兩袖を合せながら、かう言ふと、

「これで、今年は二度目ね。」

「三度目よ。」

「さうかしら、あゝさうく、三度目だ。路がまたわるくなるわね。」

「でも、どうせ降るなら、たんと、積る方が面白いわ。」

「私、雪が降るのが大好きよ……朝、起きて、雪が一杯積つてなんかみると、それは嬉しいわ。」

立つて行つて、入口の處に出て、外を見てゐた秀奴は、かう言ひながら入つて來た。

雪片は段々繁く落ちて來た。十分と経たない中に、地面や椿の葉などが、少し白くなり出した。

「今日は積るよ、これは……」

お園姐さんがそれを見て言つたが、

「それにしても何うしたのさお客さんは？」

「遅いわねえ。」

「何でも、此家では大事なお客さんらしいよ。」

「二三度逢つたことのある喜代次は説明するやうな調子で、

「立派な方よ……。それにしてもね、本當に何うしたんだらう。もう餘程前に電話がかゝつて來ただけけれど……」

「もう來てよ。」

「それは、もう何うせ来るけれど、待つてるのは長いものね……。その代り、好い男の六代目に似たお客様が来てよ。」

「本當？ 虚言でせう？」

秀奴がかう喜代次の方を見て言った。

戶外では段々雪が大降になつて、地面はいつかもう眞白になつてゐた。軒端で雀の囀るのが際立つて寒さうに聞えて来た。

番傘をさした女中が、降頻るその雪を衝いて、急いで遣つて来るのが、繪か何ぞのやうに此方から見えてゐた。

三十四

それから十分ほど経つと、一臺の自動車は、其家の前で留つて、外套を着た三十五六の男と

三十一二のインバネスを着た男が、中から出て来た。

「これはひどい大降だ。」

外套の男がかう言つて、逸早く蝙蝠傘を開いて、インバネスの男にさし懸けて遣らうとする

と、インバネスの男は、

「何アに、大丈夫だ。」

と言つて、グン／＼先に立つて門の中に入つて行つた。

「入らつしやい！」

女中達の迎へる聲が其處からも此處からも起つて来た。で、花崗石を舗いた入口の處では、客と女中と女將とが、暫し降頻る雪の中に立つて、挨拶やらお世辭やら笑顔やら 何かれと賑はしく取交してゐたが、やがて長い舗石の道を、後から押されるやうにして、豫ねて準備して置いた奥の廣間へと二人の客はつれられて行つた。

「寒いねえ。」

インバネスの男は、逸早く火鉢の上に手と顔を翳した。

「寒かつたでせう。こんなに降るとは思はなかつたから。」

派手な縞の脊廣を着た男は、かう言つて、傍に拵へてある行火に手を入れて、

「此方の方が暖かいですよ、お常んなさい。」

「うん、それは好い。さういふものがあるのかえ。」

かう言つて、今日の主人らしい其男が、インバネスを脱ぐと、金ぐさが帯の間からチラリと光つて見えた。着物は下着も上着も羽織も皆な大島づくめといふ扮装である。

それから茶が出たり、湯に入つたり、いろく手間が取れて、待かねた妓達が、漸く膳を運ぶ段取になつたのは、猶三四十分経つてからのことであつた。蝶次は入るとすぐ、好いたらしい、まだ、さう世の中にすれてゐない一人の好い男が、柱に凭りかゝつて、湯上りの顔をボツ

とさせてシガアを燻して居るのを見た。

縦縞の丹前もよく似合つてゐた。

硝戸を透して、降頻る雪の庭が繪のやうに見えてゐた。踏石の向うに櫓が三四本、緑の葉の間から目も覚めるやうな真紅な花を此方に見せてゐた。梅ももう半ば開いて、その薄紅い花の上には、雪が白く積つてゐた。

静かなしめやかな座敷であつた。客も妓達も餘り騒がしい聲は立てなかつた。お座附がすむと、あとは、三味線を弾くでもなく、をりく盃を取交はすばかりで、いろくな話がそれからそれへと續いて行つた。洋服の男の追従らしい笑聲が時々それに交つて聞えた。

かと思ふと、丹前を着てシガアを燻らしてゐたその男が、真代次姐さんの縁で、小聲で唄を唄つたり何かした。

「あそこの相の手が好いねえ。」

など、言つて、望んで小唄ものを弾かせたりした。

日はいつか暮れかけてゐた。雪は猶ほ盛んに降つてゐる。障子を明けて、縁側に出で、ひとりぼつねんとさびしさうにして、暮れて行く庭を蝶次が見てゐると、其處にその男も出て来て傍に立つた。

「よく降るねえ。」

「本當ですわねえ……」

蝶次はかう調子を合せて、

「今夜は積りますわ。」

三十五

「静かですね、東京の中だとは思はれないね。何處か遠い田舎へでも行つたやうだね。」

「本當ですわ。」

客と蝶次とは、こんなことを話し合ひながら、暫しの間其處に立つてゐた。口の聞きやうにも、何處か上品な處があつて、聲の冴えた具合が橋家に似てゐる。すつきりしてゐる。

蝶次は、夕暮にもそれと解るやうな派手な襟をして、いつもに似合はず髪を底髪に結つてゐた。此處の女將は、藝者がさういふ髪に結ふのを嫌つて、何うかすると小言を言はれることさへあるのを、蝶次は兼ねて知つてゐたけれど、今日は生憎洗ひ髪で、それに髪結さんが間に合はなかつたので、仕方なしに、母親に丸めて貰つて、そして匆匆に出て来た。それが不思議によく似合つて、いつもより餘程若々しく見えてゐた。先程も秀奴が、

「蝶次姐さんは、ハイカラがよく似合ふわねえ。」

と、さも感心したやうに言つた。

「髪が多いからねえ。蝶ちゃんは。」

と喜代次姐さんも、見惚れるやうにして言った。

「椿の赤い色も、もうすつかり見えなくなつて了つた……」
「さうだねえ。」

「日の暮れる時ツて言ふものは、何だか心細いものですね。」

「雪が降つてるから、一層さう思はれるんだよ。」

ふと何處か遠くで鳴る汽笛の音を耳に留めて、

「あれは、何處だえ？」

「何處か、工場があるんでせう、此の近所に……」

「だって、汽車ぢやないか。」

「さう？」

長く車輪の地に引摺るやうな重い音に耳を欬て、

「ぢや、成田の方へ行く汽車かも知れない。」

「成田ツて言へば、此間、自動車で行つて来た。四時間で歸つて来たよ。」

「お一人ぢやないんでせう？」

「三四人して行つたんだよ。そこにゐる田村君も行つたんだよ。」

「藝者衆は？ 新橋？」

「そんなものは、伴れて行きやしないよ。男ばかりだよ。」

「うそでせう。」

蝶次はわざと長く聲を引張る。すぐ、

「今度は私もお供をさせて下さいね。」

「寒いよ、自動車は？ それに、四時間も乗つてると、随分あきるよ。」

「でも、結構ですよ。」

其處に、障子を明けて出て来た秀奴は、

「蝶次姐さん、寒いでせう？」

かう言つて、傍に寄つて、

「雪がよく降るわねえ。」

「お前さん、早く歸らないと、今日は歸れなくなつてよ。」

「うそ、そんなことはないわ、姐さん、おどかしたって駄目よ。」

手を上げて、睨めて、わざと打つ眞似をする。

「だって、本當よ。こんなに降つちや車が利かなくなるわ。」

蝶次が眞面目で言ふと、

「さうかしら？」

蝶次が笑つてゐるのを見て、

「うそばかり、姐さん、ひどいから好い。」

その賑やかな聲に引寄せられて、桃千代がまた座敷から出て来た。

室の電燈の灯と、夕暮の微かな光との間に、妓達の着物の色彩がチラキラした。笑聲が更に賑やかに聞えて来た。

三十六

廊下を蝶次が歩いてゐると、秀奴は傍に寄つて来て、

「お客さんが聞いて、よ、姐さんの名を。」

「誰に？」

「私にさ……。それから、いろんなことを聞いてよ。姐さんの屋號だの何かを。」

「それから、何うして？」

「教へて上げたわ。」

「あの歌澤か何か唄つた方のお客さん？」

「え、さうよ。」

秀奴は笑つてゐる。蝶次も笑つて、

「此人は變ね、何が可笑しいの？」

其處に出て來た桃千代の方に向いて、

「桃ちゃん、仕方がないのよ、此子は……可笑くも何ともないことをけたく笑ふんだもの。」

「だって、好い男ぢやないの？ 姐さん？」

かう言つて、蝶次の脊中を軽く叩いて、秀奴は向うの方に遁けて行つた。

「いや、うがないのね、今度、仇を討つてあげるから好い。」

其處に出て來た洋服の方の客が、

「何をしてゐるんだえ？」

「何でもないのよ」

秀奴はわざとあどけない調子で言つて、まだ其處に立つてゐた。

蝶次が座敷に入つて行くと、客は喜代次を相手に、小聲で小唄か何かを唄つてゐたが、チラ

ツと蝶次の方を見て、すぐ調子を亂して、

「何うも出来ない……」

かう言つてよして了つた。

「おつなものらしいわね、姐さん？」

「いちらは、中々お詳しい。今「筆のかさ」を遣つてたの。」

「さう？ あそこの終ひの合の手が好いわねえ。」

かう言つて蝶次も自分の三味線を取つて、その合の手のところを面白さうにして弾いた。

「好いねえ。」

かう客も言つた。客は餘り深酒をする方ではなく、さうかと言つて、話ばかりをしてゐる方でもなかつた。ほんのりと紅い顔をして、そして時々盃を唇に當てゝゐた。

二年前に、西洋にも漫遊に出かけて行つたことがあるとかで、イタリーだの、フランスだの、話を酒の間に交せて面白く話して聞かせた。イタリーで裸踊を見に行つて、ウンと金を食られた話は、女達を笑はせた。

「それぢやおたからさへ出せばどんなことをして見せるか知れませんか。」

女達はこんなことを言つて笑つた。

「こつちへ歸つて來た時は、勝手が違つて、鳥渡變だつたよ。一年位はもとの日本人になれなかつたよ……。例へて見りや、あつちでは、夜は十一時、十二時頃から盛になるので、其時分になれば、通りを通つても、女が澤山出てゐて、聲をかけたなり何かするんだが、こつちでこそ

の時分新橋や柳橋邊を通つたつて、女なんぞ姿も見せはしないんだからね。本當に日本は闇夜だと思つたよ。何だか淋しくつて仕方がなかつたよ。」

「さうでせうね。あちらに長くるた方は、皆なよくさう仰しやいますが、何も彼も便利なんでせうからね。」

喜代次がかう話の調子を合せると、

「本當だよ。僕も、少しの間は、彼方へ歸りたくつて仕方がなかつたからな」

かうした話をするかと思ふと、客はまた鎌倉にある別荘の話だの、海の話だの、大きい汽船の話などをして聞かせた。蝶次の眼は絶えず客の笑顔の上に動いてゐた。

三十七

何か川事があつて、帳場に行くと、其處にゐた女將が、

「鳥渡、蝶ちゃん」

「……………」

「鳥渡、話があるよ。」

さういふ話をする時の一種の笑ひを女將は面に見せて、

「お前さん、好いだらう？」

「……………」

返事はしなかつたが、押せば押せないことのないやうな蝶次の顔から、女將は何物をか捜すやうにして、

「好いだらう？ 家の大事のお客なんだから、それに、向うでも、お前さんって言ふんだし。急に、口を蝶次の耳の傍に持つて行つて、

「爲めになるお客様だから、鶴田ッて言へば、大抵な人は知つてる芝の船の會社の……………」

「……………」

「何うだえ？」

蝶次の顔が笑顔から稍々眞面目な顔になつて行くのを見て

「都合がわるいかい？」

「い、え、さうぢやないんですけど……今日なんですか？」

「都合がわるいかい？」

蝶次は矢張黙つて笑つてゐる。

「それや、知つてるよ。お前さんだつて、今ぢや、餘り、さういふことの出来ないのも知つてるけどもね……………」

聲を低くして、

「内所にして置けば好いぢやないかね」

蝶次はまだ返事をしなかつた。しかし矢張笑つてはゐた、これまでの経験から、女將はこれ以上話を進める必要のないのを知つてゐた。餘り厭でもないといふことは、その顔色で解つてゐた。

立つて、向うに行かうとするので、

「ちや、好いね？ お前さん」

「今日ちや困るけれど……」

蝶次はかう言つたが、そのまゝ、下駄を穿いて、奥の座敷の方へと鋪石を傳つて歩いて行つた。

蝶次が座敷に入つて行つた時には、鶴田といふその客は、姐さん達を相手に、まだ何か頻りに海のことを話してゐた。海坊主だの、幽霊船だのといふ言葉が、をり／＼その中に交つてゐた。姐さん達は、さういふ不思議なことが實際あるのかしら？ といふやうな顔をして、熱心

にその話に聞き惚れてゐた。蝶次が入つて来ると、客は鳥渡その顔を見たが、すぐ眼を落してまた話をつゞけて行つた。

蝶次は姐さん達の傍に坐つて、客の顔を鳥渡掠めるやうにして見てゐた。さうときまつて見ると、何だか變な氣がする……いろ／＼な表情をして話をしてゐるその顔も先刻と違つて、餘り好い男ではないやうな氣もする……始めて客に逢ふ時の厭な厭な心持も何處かで微かに脈を打つてゐる……さうかと思ふと、嬉しいやうな氣もする……未決監に入つてゐる清水の顔も眼の前に浮んで来る……上方にゐる男のことも思出されて来る……。氣が附くと、蝶次はその客の右の頬の下に、小さな黒子のあるのを探し出して、じつとそれを見つめてゐた。

床柱の處で、洋服の方の客が、此方には構はず、何か戯談を言つてゐると、桃千代が、

「厭ねえ、そんなこと。」

など、言つてゐるのが、蝶次の耳には、何故か際立つて變に聞えた。

.....やがて姐さん達は挨拶をして歸つて行つた。秀奴も
「左様なら。」

と元氣の好い聲を出して行つた。蝶次が別室に行く頃になつても、雪はまだ盛に降頻つてゐた。

三十八

「檢番に通して置いて下さいな。」

かう蝶次は女中に頼んで、その六疊の一間に入つて行つた。それは廁から外縁を通つて行くやうなところにあつた。

「お休みなさいまし！」

かう言つて女中が向ふに行つた後は、四邊はしんとして、唯、雪の積る音のみがした。廁の

傍にある竹は、眞白になつて、重さうに低頭してゐた。

.....二十分ほど経つてから。踏石を傳つて来る足駄の音が、遠くから聞えて來たが、雪の積つた傘をばさりと其處に置く氣勢がして、やがて外縁を踏んで此方に來た。

「蝶ちゃん！」

靜かに外から呼ぶ聲がする。女中だ。

「お新姐さん？」

「え.....あのお氣の毒ですがね。電話がかゝつて來たんですが。」

「さう？　すぐ、行きますわ」

かう内から狼狽へたやうな蝶次の聲が聞えた。

「ぢや、何ぞ.....切らずに置きますから」

「え、かしこまりました」

やがて女中の歸つて行く足音がした。

一枚明けた雨戸から、明るい光線がぱつと闇にさしたと思ふと、やがてそこから蝶次の出て来る姿が見えた。蝶次は長襦袢の上に襟のついた縦縞の半纏を引かけてゐた。帳場へ行くと、

「お氣の毒でしたね……。母さんから電話なもんでしたから」

「母さんから？」

電話は帳場のすぐ横のところにあつた。モシモシと言ふ聲がした、續いてエ、エといふ聲がした。

長い間聞いてから、

「でも、それは困るよ。」

かういふ蝶次の聲がした。すぐ續けて、

「今日は鳥渡困るんだよ……。そんなことを言つたつて駄目だよ……。だから、さつき、検番から言つて貰つたんぢやないの？ 検番から政どんか誰か行つたでせう？ エ、エ、さう」

「迎へに来てるの？ 困つたわねえ……。それで、何うしやうつて言ふんだらう？ さう？ 待てるつて言ふの？ しやうがないねえ……。でも、今日は困るのよ。歸れやしないのよ。」

また、先方の話をや、暫く聞いて、

「だつて、しやうがないよ。母さんが一體氣がきかないんだよ……。何とか用があつて遠い處へ行つたとか何とか言つて置くとよかつたんだよ。それもね、遠い方から来たんならしやうがないけれど……。あの人にそんなことを言はれる譯はないんだから。そんなこと言つたら、何うですか、私は知りませんつて平氣で言つて置いて好いよ。怒つたつて構ひやしないよ……。直下に来るかも知れない？ 来たつて構はないよ。ぢや切るよ」

チリリンと音がして、電話はやがて切れた。

蝶次は帳場の傍の火鉢の處に来て、手を翳たり何かしてゐた。

「何か急な用？」

かう女中に訊かれて、

「い、え、鳥渡……」

と言つたが、今、自分の内に来るかも知れないと母親の言つた男の顔が、はつきりと眼の前に浮んで来た。木川にも誰にも内所で、その癖、心を打開けるといふ方ではなく、何方かと言へば慾で引懸つてゐた男のことが思ひ出された。思ひ切の悪い、養切らない厭な男——

「構ふもんか……。世話などしてくれなくなつて好い」

蝶次はかう腹の中で痰阿を切りながら、元氣よく敷石を傳つて、引返して行つた。

「お、寒い！」

かう言ひながら、蝶次はその六疊に入つて行つた。

三十九

「まだ降つてるかえ？」

「え、降つてますとも。餘程積つたやうよ。もう一尺位積つたかもしれないわ」

「何處から懸つて来たの？」

「電話？ 家からか、つて来たんですけどもね……」

「何か用かえ？」

「母さんがかけてよこしたんですけどもね。別に用でも何でもないんですの……」

「歸らなくつちやいけないだらう？」

「い、のよ。もう、歸れはしないわ。」

行火に觸つて見て、

「火が消えたのかしら、ちとも暖くないのね。」

「さうだね、いつそ出して下さった方が好いかも知れない。」

「出しちや寒いわ。」

かう言つて、

「待つてゐらつしやい。私、見るから。」

蝶次は行火を其處から出して、傍に置いてある火鉢の火箸を取つて、火をほり起して見た。紅い火が中から出て来た。

「大丈夫よ、消えたんぢやなかつたわ。…こんどは暖かいわ。」

雪の雨戸を打つ音がをり／＼サラサラと聞えて来た。

話は暫く其處から聞えて来なかつた。五燭の電燈が静かな落附いた光をその狭い一間の中に

投けてゐた。軒に近い雪の竹の起きかへる音がした。

「本當かえ？」

「結構ですけれど…私のやうなものは駄目よ」

「そんなことはないよ。本當にさうかえ？」

「でもね。本當に、私のやうなものは、駄目ですものね。」

「君は駄目でも、僕の方が大丈夫なら好いだらう。え？」

「それは嬉しいけれど…」

これで、また話が絶えた。

「でも、不思議だね」

また男の聲がした。

「何故です？」

「でも、これまでこんな風に心持がなつて行つたことがないからね。縁だね矢張……」

「さう、本當？」

「お前は？」

「……………」

蝶次の静かに笑ふ聲がした。

思ひもかけない力が不意に襲つて来て、そして不意に蝶次の心を今まで知らなかつた境に連れて行つた。蝶次はやさしい男の心に忽ち引かれて行つた。

「本當なの？ 貴方。」

今度は蝶次の方から言つた。

「僕は大丈夫だよ。」

「何うだか知れませんかね。何處かに好いのがあるんぢやなくつて？ 罪よ、本當に、好い加

減のことを言つては！」

「そんなことはない」

「ぢや、私のやうなもんでも好いのね」

念を押すやうにして、

「本當に……私、真剣で言つてゐるのよ。商賣氣で言つてゐるんぢやないのよ……」

男の顔を見て、

「本當ね……」

「本當だとも……」

「さう。嬉しいわ」

二つの手はいつか堅く握り合はされてゐた。

「ぢや、これまで私に言つたことは、皆なうそなんですか。」

やさしい、しかし思ひ詰めたやうな男の聲が言つた。

「うそつて言ふ譯ぢやないけれど、貴方のやうに言はれても困るわねえ。何うせ、私は稼業な

んですもの、お世辭に言つたことだつてそれはあるわ。」

男は昂奮した蒼い顔をして黙つて坐つて居た。

少し経つてから、

「……ぢや、私の言つたことは聞いて呉れられないんですね？」

「それや、さう貴方の言つて下さるのは、それは有難いけれど……」

蝶次は半ば打解けたといふやうな顔をして、

「……ぢや、私の言つたことは聞いて呉れられないんですね？」

「だから——此間言つたやうにしても、それでも駄目なのかえ？」

この男は蝶次の爲めには——あらゆる束縛から蝶次を自由にする爲めには、自分の財産を全部提供して了つても好いといふほどの熱心を示してゐた。女の望むことは何でもしてやる——

その代り稼業をやめて呉れと平生言つてゐた。

蝶次は面倒臭くなると、いつも其話を唯點頭いてばかり聞いてゐた。金の話を男が持出すと。

「だつて、私は少しばかりの金ぢや、中々抜けない體なんですからね。二千や三千は何うした

蝶次がいつまでも黙つてゐるので、

「何うなんだえ？」

「鳥渡、返事が出来ないわねえ。」

「ぢや、私の心は何うしても届かないんだねえ。」

かう言つて、容はいつもの萎れた顔をして、

「いくら思つたつて駄目なんだねえ。」

「ぢや、本當のこと言ふわ。」

蝶次は客の蒼い生真面目な顔を見ながら、思切つたといふ風で、

「本當のこと言ふと、私、貴方の奥さんになるつて言ふ譯には行かないわねえ。奥さんなんかになつて、氣のつまる思ひをするのもイヤだし、それに、奥さんになるには、ちつとやそつと話をした位ではなれないわねえ……。しんから惚れたとか何とか言ふ氣分でなくつちやねえ。」

……。此間、私が一晩家を明けて、大變、あの時、母が貴方に何か言はれたつて言ふけれど、私は、藝者をしてるぢや、あの位のことは何でもないつて思つてゐますからねえ。貴方、知つてるでせう、あの木川さん、あの人だつてさうよ。あの人だつてその位のこととはあつたつて文句は言ひはしない……。貴方だつて、これまで遊んだことのない人ぢやなし、下谷ぢや随分お馴染もあつたつて言ふんだし、ちつとは、藝者の心持だつて知らないことはないんでせうから、藝者を自分一人で何うかしやうなんて言ふ野暮な考を起さない方が好いと思ふわ。それに、私をそれほどに言つて下さるのは嬉しいけれど、他にいくらも好い藝者衆があるんだから……。」

これまでも蝶次はこれに似たことをよくこの客の前で言つた。しかし今日ほどつけつけした言ひ方をしたことはなかつた。客は蒼い顔をして、ブル／＼體をふるはせてゐた。この客は増田と言つて、近所の銀行に勤めてゐた。

この頃蝶次の様子が變つて來たのに木川も氣が附いた。何となくそはそはしてゐる。落附いたやうな氣分もなくなつて來てゐる。それに眼が何處となく輝いてゐた。

一月に一度か二度、多くつて三度位しか來ない其時にも、家を明けて蝶次の居ないやうなことがをり／＼あつた。竈割で止むを得ず芝居に行つたとか、長唄の會で、義理で、從姉の許に行つたとか、何うしても出なければならぬお座敷に出たとか——さうでない時にも、二時間も三時間も待たせて、酒に酔つた紅い顔をして、お座敷着の裾をほら／＼させてだらしない風をして歸つて來た。

「しつツこいお客様で困つた……」

など、言つて申譯をする言葉が、却つて木川の疑惑を惹くやうな場合が多かつた。

木川がじつと蝶次の顔を見詰めたり何かすると、蝶次はいくらか眩ゆけな様子をして、鳥渡下を向いて、そして今度はわざとその裏をかいてやらうとするやうに、キツと男の顔を見詰めた……。

増田と言ふ男があるといふことを、木川が聞きもしないのに、此頃不思議にも蝶次の方から言ひ出して、そんなに男に深く思はれたことはないの、あんなに女の言ふことをすぐ本當にするお客はないの、深く思はれ、ば思はれるほど情が移つて來たのが不思議だのと言つて聞かせた。

「困つて了ふのよ、私の言ふことを皆な本氣にして了ふんですもの」

かういふ言葉も木川は幾度か聞いた。

「何うかしてるね、此頃？」

木川がこんなことを言ふと、蝶次は軽く笑つて、

「解りますかねえ？」

「解るね、何うも變だね。岡惚れか何か出来たんだらう？」

「……………」

返事はせずに笑つてゐた。酔つてなぞゐると、ふと思ひ出しでもしたやうに、指を口に當て鼠泣きをして、

「まあうれしい、思ひがとくわ」

など、言つた。

それに、不思議にも、此頃は金に不自由をしてゐる様子が見えなかつた。二三月前までは、

「おたからがないわ」

と言つて財布を放り出したり、

「貴方、少しお小遣を頂戴」

など、言つたものだが、此頃では、

「私、おたからがあつてよ。貸して上げませうか。」

など、笑ひながら言つた、時には、高價な財布だの流行の羽織の紐だのを買つて来て、男に呉れた。

かと思ふと、今更そんなことに気が附いたかといふやうに、

「貴方、惚れるツて言ふことは不思議なものね……え。本當に不思議ね。」

「何故？」

「だつて、つくづくさう思ふことがあるから。」

「此頃……？」

「……………」

蝶次は笑つてゐる。

流石に、木川も、男性の苦悶に驅られて、黙つて、不愉快な顔をしてゐることなどがある
と、

「私、此頃、少し何うかしてゐるんだから、堪忍して頂戴、ね？ 私がわるいのよ。」
蝶次は思ひ詰めたやうに言つて、そして男の手を強く押した。
「何うしたんですか、此頃は本當に仕方がないんですよ。」
母親もそんなことを言つた。

四十二

「お前、電話だよ。」

かう母親が知らせに来て、聞いて歸つて來てから、蝶次は落附いて坐つてゐられないやうな
風に見えた。

「貴方、今日はゆつくりしてゐて好いでせう？」

酒に酔つた木川の顔を見ながら言つたが、すぐつゞけて、

「是非、鳥渡でも行かなくつちやならないお座敷だから。」

さう言つて、二時間ほどと言つて出て行つた蝶次が、其日は夜の十時過ぎになつても歸つて
來なかつた。行つた家に電話をかけると、

「お客様と鳥渡出かけてまだ歸つて参りません。」

かう其家の女中が言つた。驚いたことはそればかりではなかつた。其足で、蝶次はそのお客
様と海岸に一緒に出かけて、それから二日ほど其處に居た……

「お前、困るぢやないか、木川さんにだつて、それぢや濟まないぢやないか。」
母親が心配してかう言ふと、

「心配なんかしないだつて好いよ。そんなことは私はちやんと知つてるよ。」

この頃蝶次に好い客が出来たといふことは、段々あたり近所にも知れて行つた。

「さうですつてね。」

な、ど人々は噂をした。

「好いお客だつてね。」

「好いわ、それは……。此間も自動車に乗つて、濟して行つたよ。」

「運が向いて来たね、蝶ちゃん。」

「本當ね……。去年あたりまでは、まだ、あそこの二階にゐて、困つてゐたのにねえ。」

「それに、今頃ぢや、もうしみく御惚けなんか聞かせられることがあるよ。」

仲の好い雪子は笑ひながら、

「さうですともねえ、此方からも惚れてゐるんですともねえ。何うして、こんな心持になつたか自分にもよく解らないなんて、此間も言つてたわ。男の方も、屹度旨いのよ。」

「でも、だまされるやうなお客ぢやないから好いわねえ。」

「それはさうね。」

「それに、蝶ちゃん、何處か、惚れつぽいところがあるよ。」

「でも、ねえ、無闇に惚れるツて言ふ方でもないんだけれど……」

雪子は相手の方を見て、

「中々利口だからね、蝶ちゃんも。」

こんな話が其處でも此處でも繰返された。

「母さん、困ることもあるんだつて、二階に、あの人に来てゐて、蝶ちゃんがゐなかつたり何かして。」

かういふ立入つた噂も聞えた。

蝶次は三月の末に、今、居る家から、土手の下になるやうな處に移轉して行つた。それは新

建の貸家で、二階が以前の家よりも二間ほど廣かつた。移轉の日には、木川が夕方から遣つて来て、酒を飲んでゐた。

川に添つて来た路は、其處で曲つてゐて、角に交番があつたり、その向うに小さい病院があつたりした。西洋料理の何とか亭といふ家の入口の色硝子の夜の灯は、蝶次の二階の窓から明るく見えた。

ある日の午後、一臺の自動車は、長い間その土手の上に留つてゐた。もうそろそろ花も咲かうといふ頃で、午後の春の日の影は、のどかに土手の青い草の上を照してゐた。と、やがて下の二階屋の格子戸が靜かに明いて、其處から石の階段を土手の方へとその容の上つて來るのが見えた。蝶次はあとから續いた。

四十三

土手を下に、向う側になつてゐる直次姐さんの家からは、蝶次の新たに移つた二階家がよく見えた。窓のところに、石菖だの、蕩だの、柘榴だの、鉢が出してあつて、朝に夕に、それに水をかけてやつてゐる小さい如露の白い手が見えた。

「蝶ちゃん、よく植木を大事にするね。」

お座敷で、直次がかう言ふと、

「だつて、姐さん、お袋が自分で好きで買つて來ておいて、水は忘れてやらずに居ることが多いんですもの……。もう、餘程いけなくして了つたんですよ。」

自動車が日影を受けて、土手の上に長い間待つてゐるのも此方からよく見えた。始めは、珍らしがつて、其時は土手の上までわざ／＼見に出かけて行つた。

「船の會社の若主人さんですつてね……。鳥渡、ハイカラな好い男ね。」

其處に出入りする近所のある妓は、丁度自動車から降りて蝶次の家に入つて行く處を見たと

言つて、羨しうに話した。

「だから、私のやうなものでも、運が向いて来ないとは限らないねえ。」

昔から此土地にゐて、容色がわるいので、好い旦那も碌々つかない妓が、其時、其處にゐて笑ひながら言つた。

「それに、此頃は、姐さんなんか聘んで騒ぐやうなことはなくつて、大抵しんねこか何かなんですつてね。二日も三日も、あそこの奥の萩の座敷に二人切りでゐることなどがあるんですつてね。」

「それや、蝶ちゃんは、此頃は大變なんだよ。」

かう直次は言つて笑つて、

「此處で見るとね、来る時には、屹度寄つて、そして、一緒に自動車で行くんだよ。エールか何かかけて、蝶ちゃん、この頃ぢや、すつかり奥さん氣取りさ……」

「さうね、此頃、髷に結つてゐることが多いわねえ。」

其處に来る妓達は、こんな話を盡きずに話した。

ある日春雨は蕭やかに降つてゐた。花はもう大分蕾が赤くなつてゐた。車は行つたり来たりする。其處此處では、花の間の掛茶屋にもう忙しく取りかゝつてゐた。交番では、巡査が外套姿で、糸のやうな雨の中にじつと立つてゐた。

その朝、蝶次は藍蛇の目の細い傘を翳しながら、湯歸りの艶な姿をして、一步一步向うから土手の方へとあがつて来てゐた。と、交番の前を通つて、直次姐さんの家の處に来やうとする時、ボーといふ音がして、一臺の自動車が勢込んで後から走つて来た。はッと思ふ間もなかつた。自動車は蝶次の傍を通り越して、其まゝ五六間先に行つたが、すぐ引返して来て、プーと微かな音を立て、曲線を描いて停車した。蝶次が其處に行つた時には、男はもう自動車から下りて、蝙蝠傘をさして雨の降る中に立つてゐた。二人はやがて笑ひながら、縫れるやうに

し、歩いて行つた。

直次の家の硝子障子からは、それが丸で繪か何そのやうになつて見えてゐた。

四十四

ふと氣が附いたやうに、蝶次は帯の間からもみくらやにされた一通の手紙を出した。

「こんなことを言つて來るんですから、困つて了ひますよ。」

かう言ひながら、蝶次はそれを男に渡した。男は傍の柱に凭りかゝつてシガアを燻らしてゐた。

男の眼はやがて、餘り上手でない男の手蹟の上へ落ちた。

……御目にかゝりたく、度々御手紙さし上候得共、御返事無之、最早御目に懸られぬことかと心配致し居候。

貴女には何も申上げる廉も無之、皆な私の愚かさより起り候ことに有之、今更くやむも詮なきことながら、和故か今に貴女のこと忘れ兼ね、眼の前に其姿ちらつき、朝に夕にそのことのみ思ひ詰めをり申し候。

此間 勝手なこと申し、それにて御腹立ならば、幾重にもお許しのほど願ひ上げ候。あれから歸り、どんなに苦み悶え候ことか知れ申さず候。御存じの老婢も何呉れと心配致し呉れ候あれから、あの翌日も、その翌日も、銀行をやすみ、終日床の上に輾轉いたしをり候。親にも早く死なれ、國に兄弟有之候他何の係累も無之、何うか、此の間申したるやうに、暖かき家庭づくりたく存じ、貴女も一應は御承知下され候ことゆゑ、此上なく嬉しく存じ候ひしに、……一朝にして、とてもかなはぬ望みと相分り申し、如何にしてよきやら、唯々煩悶致し候より他に業なく候。

……しかし、如何にしても貴女のごことは忘れかね候。貴女のごこと相忘れ候時は、即ち小生

の死の時と存じ候。如何やうなることにても、貴女の望むところにて、小生の出来候ことな
ら致し申すべき覺悟に有之候間、小生の望みの萬分の一をも御叶へ下され度幾重にも願ひ上
候。是非々々近い中に一度御目にかゝりたく、今度は決して勝手なこと申すまじく……、こ
の苦しい暗い境遇より御救ひ下されたく、亂筆御ゆるし下され度候。匆々。

三月二十二日

増田

蝶さま御もと

「面白いラブ・レターがあるもんですね。」

「本當に困つて了ふんですよ。實際、眞劍にさう思つてゐるんですから、此間など、餘りだか
ら、私、少し言つてやつたんですの？　するとネ、蒼青になつて、黙つて了つて、口も利けな
いといふんですもの。」

「しかし、貴女に、心から惚れてはゐるんですね。」

やさしい静かな調子で、微笑を顔に漂えながら男が言ふと、

「でも、惚れられたつて仕方がありませんものね。」

「それは、さうだらうけれど……。」

静かな、沈着いた笑を帯びた聲で、

「君だつて、惚れれば、さういふ心持を起さないとも限らないんだから。」

「それはさうですとも。」

蝶次は笑ひながら男の顔を見た。

四十五

二人を乗せた自動車は田舎の街道を駛つてゐた。

蝶次は巻の出た意氣な丸髷に結つて、お召の羽織を着て、ダイヤの指環を光らせて、男と並

んで、嬉しさうにして坐つてゐる。男は縞の薄手の外套の袖を袷かな野の風に吹かせて、をりく思ひ出したやうにシガアの煙を口から立てゝゐた。二人は何も言はなかつた。楽しい握手をさへしなかつた。二人は幸福と快樂とに全く酔つてゐた。

晴れた五月の野は、すべて二人を祝福するやうに見えた。青葉若葉の緑は、到る處に日にがいやいて、麥畑を出た雲雀の聲は高く頭の上に聞えた。けんけが赤い毛氈を敷いたやうに一面に咲いてゐる處などもあつた。

野には既に忙しい時節が來てゐた。畠を耕す人が遠い丘のところを點々として見えてゐるかと思ふと、笠を被つた女達は、田植の手を止めて、一齊に自動車の通つて行く街道の方を振り返つた。

植ゑ残つた早苗の小さい束が、二束三束田の畦に捨て、あつたり、杜若が小さい池の中に二三本さびしさに咲いてゐたりした。折れ曲つた野川には、葦だの藺だのの新芽が一面に生え

て、肥料を載せた田舟を、長い棹で百姓が押してやつてゐるのが、からくり人形のやうにはつきりと此方から見えてゐた。

手拭を被つた一人の老婆は、驚くべき怪物でも遣つて來たといふやうに、慌て、路に避けて自動車の見えなくなるまで遠く見送つてゐた。

『大師様よ。あれが……』

黒い森の中に大きく出てゐる墓を指して蝶次は言つた。

『其時分、よくこの大師さまに御願ひして、何うか早く一人前の姐さんになりたいて、毎月御参りをしたもんですよ。』

こんなことを言ふかと思ふと、街道に沿つて通つて行く汽車に指して、

『あの汽車にもよく乗つたもんですねえ。姐さんに三味線を教はるのがつらくつて、一人である晩停車場に行つて、通つて歸つて來たことがありますよ。あの時分のことを考へると、ま

だ無邪氣なものでしたねえ……。メリンスの前垂か何かしめて、漸く汽車賃だけで、歸つて来たんですからねえ。え、丁度、其時十三でした。」

「何ッて言つてたのかえ？ 其頃は？」

「花子ッて言つてゐたんですの。」

蝶次は片頬を笑ませて見せて、

「其時分内の住んでゐた處が、さういふ娘ばかりだったもんですから、親がいけないッて言ふのを、何うしても藝者になるつて泣いて言ふことを聞かなかつたんですつて……。それに、家でも其頃は困つてゐて、お袋と、亡くなつたお爺とがよく喧嘩をするのを見てゐられなかつたといふのもあるんですね……。」

「それから、すつと、其處にゐたのかえ？ かなり大きくなる頃まで、」

「十三の時、一度歸つて、それからよし町へ出て、十六の時、譯があつてやめて、その翌年、

また其處へ出たんですがね。一年ほどゐましたかね。それは、本當に面白いほど賣れましたよ。」

「その時は？ 名は？」

「小園ッて言つてゐたんですの。その一年は随分面白かつた。今でも町で知つてゐる人は大勢ゐるでせう、屹度……。今日、行くと、姐さん、そりや、屹度吃驚するわ。」

四十六

「田崎ッていふ若旦那に圍はれたのは、その二度目の時ですな？」

「え、さうなの。」

「それで、さう長く一緒にも居なかつたのかい？」

「え、半年位ゐましたけど……。親類の方で喧しくつて、それに婚約の奥さんがゐる……。私

その奥さんに逢つたことがあつたわ。何うせ、田舎の娘さんですけども、女學校に行つてゐたから、少しはあか抜けがした、ハイカラのところのある容色の好い人でしたよ。もう、三人位子供があるんでせう。」

男の顔を笑ひながら見て、

「その時は、下女と二人きりで、お袋が少しの間世話をして来てゐて呉れましたんですがね。野菜など何でも家の周囲で出来るんでせう。南瓜でも、茄子でも、玉蜀黍でも……。それは暢氣でしたわ。」

「田舎は好いね。」

「ほんたうですね……。何處か一つ別荘があると好いわねえ。鎌倉も好いけど、あそこは混雜してゐるわねえ。随分——」

「別荘なんつて言ふものは、海岸や温泉のある處よりも、却つてかういふ唯の田舎の方が好い

んだよ、東京に近い唯の田舎の方が——。ロンドンなどでは、西洋人は皆なさうしてゐるからね。」

「さうですかね……。ぢや、貴方も一つさういふ別荘をおこしらへなさいな。」
艶かに笑つて見せて、

「本當に、さうしたら嬉しいでせうね、暢氣で、静かで……。地面なぞ屹度廉いわ。姐さんのつれ合になる人が、さういふことをよく知つてゐますがね。何でも廉いやうな話よ。」

「氣に入つたら、その内一つ、内所で拵へるんだね。」

「本當ね……」

蝶次は幸福と喜悅とで胸が一杯になつたといふやうな表情をして、

「本當に嬉しいわ、かうして田舎に伴れて行つて頂くのは。本當に故郷に錦を飾るツていふやうな心持がするわ。」

嬉しさうに。

「姐さん、屹度吃驚してよ……。それから、姐さんのおつかさんといふ人がゐるんですよ。この人が、私が花子ッて言つてゐて、姐さんに三味線を教はる時分、よく可愛がつて呉れたんですの。もう六十五六でせう、屹度……」

「それからずつと逢つたことはないのかえ？」

「姐さんのつれ台ひには、一二度逢つたことがあるけれど、姐さんにも、おつかさんにもその時きりなんですからねえ。でも、本當に嬉しいわ。こんな昔の話なんか、私、これまで誰にもしたことはないんですの……。何うしても、貴方には話さずにはゐられないやうな心持になつて了つたんですわね。貴方とかうして一緒に田舎に來やうなど、は今まで夢にも思ひがけなかつたんですものねえ。」

いつの間にか、蝶次の手は、堅く男の手を握りしめてゐた。

自動車は絶えず駛つてゐた。松並木の長く續いた向うには、小さな村や、傾いた藁葺の家の續いた汚ない衰へた昔の驛などがあつた。ある町を通り越すと、野がまたひろくとその前に開けた。

「もう、ぢきだらう？」

「え、この先の村を通り越すと、もうすぐその町ですわ。」
二人は長い間手を離さなかつた。

四十七

白壁の土蔵だの、半鐘臺だの、大きな寺だの、中學校らしい建物だのが、やがて遠くその前に見えて來た。

彼方此方と指し示して、

「そこいらには私はよく来たもんですよ。」
とか。

「その向うに見える家は、土地の博奕打の親分で、幅を利かせてるたもんですが、今も丈夫で
ゐるか何うか。」

とか。

「この向うに、私の居た家の持つてる島があつて、おばアさんとよく一緒に来たもんです。」
とか、あたりのものがさもなつかしさに堪へないといふやうに、蝶次は盡きずに男に話しかけ
た。

「向うが杉坂といふ村で、其處に、そら、白く大きな蔵が見えるでせう。その主人が、さうで
すね、其の時分、四十五六でしたかね、よく遊びましてね、藝者を幾人も請出したり何かした
んですよ。その癖、自分で圍つて置くつて言ふんでもないんですね。自由にして遣つて、喜ぶ

顔を見さへすりや、それで好いッていふやうな人なんです。泣いて喜んで歸つて行つた
流行らない藝者などもありましたわ……。え？……。それで後では餘程身代を悪くしたッてい
ふはなしでしたけれど、此處等では名高い金持ですから……」

こんなことも話して聞かせた。

二筋に岐れた街道の角の處にある大和障子を半明いた家の前を掠めて通る時には、

「其處は角忠ツて言ふ家よ、百姓が町に買物に来て、鳥渡寄つて行く處よ。」

かう蝶次は男に言つた。

自動車は此處等にはまだめづらしかつた。誰も皆な驚いたやうな顔をして、それを見送つた。
わざわざ内から駈け出して来る人達もあつた。

「まア、何て早いんだんべい。吃驚したア。」
など、いふ聲も聞えた。

やがて人口三四千もあらうと思はれる鹿の長く出た。瓦葺に薬蕨を交へた不揃な田舎の町が男の眼に映つて来た。始めは家と家との間に桑畑や麥畑があつたが、それが段々立込んだ町になつて行つて、後には、大きな呉服屋だの、砂糖屋だの、旅籠屋だのが兩側に軒を並べてゐた。煉瓦作の銀行の入口には、自動車が一箇置いてあつて、行員らしい男が二三人出て見てゐた。

「少し静かに……」

かう聲をかけられて、運転手はブレーキを卷いた。自動車は速力を緩めて、静かに町を通つて行つた。

町の中程には、幅五六間もあらうと思はれる川が流れてゐた。其處には石橋がかゝつてゐて、葡萄棚を前にした二階屋の料理屋が向うに見えた。此方にも小さい料理屋が二軒並んでゐた。

「此處等は、皆な私が来た家よ。知つてる内ばかり。」

蝶次はかう言つたが、川の上流の方に、日にかがやいてゐる若葉の森のあるのを指さして、「其處に行くと、好い處がありますよ。お宮があつて……庭が廣くつて……それは好いわ。よく其處に遊びに行つたものよ。」

藻が浮いたり、葦の新芽が生えてゐたりする川には、日影が晴れやかに照つてゐた。田舟が一艘沈んだやうになつてゐた。

橋から少し来た處には、しもた屋が二三軒並んで、四ツ目垣だの、意氣な高窓だの、太い格子戸の入口だのが續いた。何處かで三味線の音がしてゐた。

「其處で留めて……」

かう不意に蝶次が言つた。しかしその留つた時には、自動車はもう七八間先に行つてゐた。

四目垣の中に立つてゐた丸鬚の上さんが、不思議さうな顔をして暫らく見てゐたが、いきなり、

「まア、花ちゃん！」

と言つて飛んで来た。

「まア、花ちゃん。」

「姐さん！」

蝶次はかう言つて、車から下りて、小刻な足音をさせて、急いで其方へと驅けて行つた。男が見て居ると、二人は抱き合はぬばかりにして、さもなつかしさうに暫く其處に立つて話して居た。やがて蝶次が家の中に案内されて入つて行くと、今度はその上さんが自動車の傍へ

遣つて来て、

「何うか、見苦しい處ですけれど。」

「いや、難有う。」

「本當に、汚なう御座いますけれど。」

田舎でも、一度藝者をしただけに、何處かあかぬけのした、人をそらさない如才のない處のあるのを客はすぐ見て取つた。

「本當に、何うか。」

「え。」

暫くして鶴田が自動車から下りて、其處に入つて行つた時には、蝶次は長火鉢の傍に坐つてその丸鬚の上さんと何か熱心に話してゐた。

格子戸を潜つて男が入つて来るのを見ると、